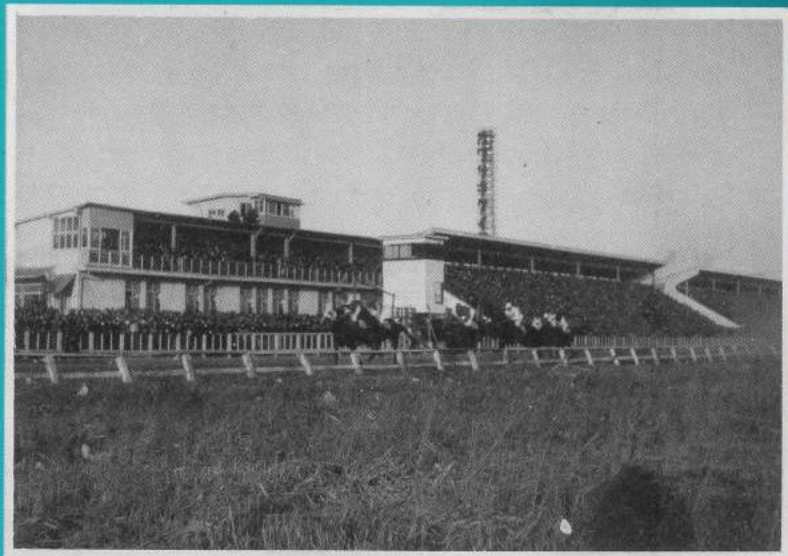


# 川崎競馬

— 伝えたい記憶 残したい記録 —



川崎競馬倶楽部

## ごあいさつ

早いもので、川崎競馬倶楽部の活動を初めて23年目になりました。1990年秋のある日、川崎競馬場の広報担当者から声をかけられた日のことをよく覚えています。「女性ファンをもっと増やしたいのだが、何かやるにも予算がない。よかったら協力してもらえないか?」、そんな内容の相談でした。たしかに川崎競馬場にはあまり女性ファンの姿はなく鉄火場風。友人たちと中央競馬の延長気分で川崎競馬へ遊びに来るようになったばかりだった私は知らないことだらけで、ちょうど応援していたジョッキーがその日も次の日もレースに騎乗しないことにごうして乗ってないんだろう?と疑問を持っていたタイミング。当時はインターネットが盛んになる前で、スポーツ新聞でも地方競馬の話題はわずかに前日の成績が載っているだけという時代でしたので、それ以外の情報をファンが知るすべはほとんどありませんでした。

それなら!と好奇心旺盛な仲間たちと出した結論は「知りたいことは自分たちで調べて伝えてはどうか。川崎競馬という町内会の回覧板を作ろう」というもの。まるで学級新聞を作るような感覚で始まったのが『川崎競馬倶楽部』という瓦版づくりです。広報の方と企画を相談し、取材に同行していただいて取材を進めました。

それから発行しつづけてきた情報紙も2004年からカラー版となり、現在はインターネットでの情報発信へと切り替わりつつありますが、私自身も気がつけば伝えることが生業になっていました。

日本に近代競馬が誕生して150周年となる2012年。発祥の地である神奈川県川崎競馬場ではJBC開催が行われます。歴史的意味のある年に、こうして川崎競馬の歩みを後世に残すお手伝いのできたことに感謝します。

拙い編者に根気よく時間を割いてくださった関係者の皆さんに、この場をお借りして御礼申し上げます。

2012年JBC開催を前に  
中川明美

## —伝えたい記憶 残したい記録—

## 《目次》

## 川崎競馬クロニクル

1950年代

1960年代

1970年代

1980年代

1990年代

2000年代



2

4

6

8

10

12

## 神奈川県競馬小史

14

## 川崎競馬を熱く駆け抜けた名馬たち

19

キヨフジ

20

リュウトキツ

21

ファインポート

22

シャドウ

23

ミルコウジ

24

ダイタクジーニアス

25

ロジータ

26

カシワズプリンセス

27

ドルフィンボーイ

28

インテリパワー

29

ダイヤモンドコア

30

エスプリシーズ

31

モエトレジャー

32

ロッキーアビール

33

川崎のアラブたち

34

## 佐々木竹見インタビュー

35

## 川崎競馬に所属した騎手たち

37

## 川崎競馬一門系譜図

52





# 1950年代

昭和25年～34年



近代競馬の発祥の地になった神奈川県は、鎌倉時代から馬事に根付いた土地柄で旗競馬や祭り競馬が盛んに行われていた。県内に8カ所あった競馬場が昭和2年の地方競馬開始と共に平塚、藤沢、小田原、大船の4カ所に。8年には軍馬の育成補助のため戸塚競馬場が作られ、これが現在の川崎競馬場の前身と言える。

細かくいえば昭和6年に大師競馬場として1200mの走路が作られたこともあったが1600mの戸塚競馬場がオープンしたことで移行していった。戸塚競馬場は戸塚町吉田から汲沢へと移転し、戦時中は鍛錬競馬も実施された。すべて横浜競馬に習って右回りだったという。

戸塚競馬は昭和24年には地方競馬で全国一の売上げになったこともあったが、競輪などの台頭もあって一気に低迷、川崎に競馬場を開設する計画が

本格化し、富士紡績の工場跡に工費1億5000万円をかけ工事は始まった。

焼け跡にあった瓦礫の山が片付けられ、ブルドーザーで平地にされると基礎工事の鉄柱が次々に打ち込まれる。焼け野が原にあった廃墟が競馬場へと再生された。約5万5千坪の敷地に、一周1200m、幅25mの走路とスタンド等がわずか6ヶ月の突貫工事で建設された。工場跡にただ一本残っていた煙突はそのまま残され、「カワサキケイバ」と大きく描かれた。

昭和25年1月25日。川崎競馬場は第1回県営競馬をスタートさせた。第1競走は1200m戦のアラブ12頭立て。2コーナーで先頭に立った斉藤騎手のザオーがそのまま入線。川崎競馬初の勝ち馬となった。2着には細堀騎手のオーダマリー、3着は60キロを背負った森田騎手のナスカツだった。

第1回開催は5日間で入場人員



51,422人、売得金は82,150,200円というにぎわいであった。

厩舎はというと、競馬場から2.5kmのところにある小向の1万6000坪余の土地に350頭分の馬房がある厩舎が造られた。昭和26年11月からは河川敷を借りた小向練馬場での競走馬の調教が始まったが、それまではどうしていたかといえば、毎朝、競馬場までひいて運動させたり、土手をガス橋の方まで歩かせたりしていたという。

昭和26年1月21日。川崎競馬場の開設一周年を記念して「第1回開設記念」が行われた。3000mのマラソンレース、長距離馬がもてはやされた時代だった。開設記念は28回から「川崎記念」と名称変更して現在もつづいている。

26,828名の大観衆が見まもるなか、優勝したのは7歳馬エソテツザン。64キロの斤量を背負ったエソテツザンは半マイルからすでに先頭に立ち、その

まま押し切る強い競馬をした。鞍上は小笠原円之助騎手。調教師も兼業していた。

エソテツザンは国営競馬で京都記念を2着し、天皇賞へ出走したあと6歳で川崎にやってきた。昭和26年の資料を見ると、地方競馬は国営競馬の2.5倍の190億円を売り上げる地方隆盛期。国営、地方の垣根も低く、行き来が盛んだった。

その後、エソテツザンは10歳の2月まで走ったことが記録に残っている。





# 1960年代

昭和35年～44年

高度成長期の真っ只中にあった日本経済。オリンピック開催の好景気にも沸いた昭和1960年代。競馬の売上げもうなぎ昇りでレコードが続出し、川崎競馬でも昭和35年の売上金は前年比21%増。さらに28%増、40%増と年追うごとに伸びていった。

障害レースが盛んに行われ、そして終焉していったのもこの時代。障害競走とはコースの上にある竹柵や生け垣などをジャンプしながらゴールを目指すレース。スピードに乗りながら人馬一体となって障害を飛越するスリルに魅了されたファンも多かった。

障害競走は浦和、船橋、大井、川崎の4場すべてで実施され、今でも内馬場をよく見ると各々たすきがけにあった障害コースの名残を見ることができ。残念ながら昭和40年代になるとまずは大井が障害競走を廃止し、他の3場でもだんだんとレース数が減少し

て、ついには番組が組まれることもなくなってしまった。

4場の中でも障害競走のメッカだったのが川崎競馬場。内馬場の改修により、たすきコースの面影もわかりにくくなってしまったが、川崎では「紅ばら賞」という障害の重賞競走もあった。

紅ばら賞が最後に実施されたのは昭和41年1月11日。

2500m戦で優勝したのは岩本洋騎手が騎乗したホツカイ。平地レースでも実績のあった馬で、道中は中団で障害を飛越しながら3コーナーでは2番手に進出、直線では5馬身突き放す圧勝だったという。

ジョッキー時代、この最後の紅ばら賞にも騎乗し、障害競走を得意としていたひとりが田村豫志雄調教師。

「浦和は置き障害だけで、あとの3場には障害用のたすきコースがあった。一番の難所とされたのは川崎にあった



大水壕。川崎の障害コースは独特で、2100m戦では通常の左回りだが、2500m戦になると反対回りでスタートしてたすきコースに入る。たすきに入ったカーブからすぐに水壕を飛ばなければならぬのが難しくてね。腕の見せどころでもあったよ。他の障害コースでは成績を出していてもこの水壕を嫌がって川崎コースでは勝てない馬もいたくらい。岩本さんのホツカイと俺のカミタカラオーでレコードの出し合いをしたこともあったなあ。平地ではD1クラスなのに障害だとオープンで特に雨の日は負けなってしまうコーワライトなんて馬もいた」と懐かしんでいたが、川崎では障害競走が一日に2レースくらい組まれた盛んな時期もあったという。

また、1960年代の出来事として昭和36年3月に起きた騒擾（そうじょう）事件のことも記録しておかなければならないだろう。

3月2日の第10レース、アラブ系C4特別で出走直前になって圧倒的1番人気のスターシユートが右脚に故障を生じ競走除外になった。

しかし発走間際だったこともあってファンへのアナウンスが徹底できないままレースが発走になってしまった。同じ6枠にはもう一頭ギンヨクがいるため6枠絡みの馬券は返還の対象にならない。

そのことでファンは「馬券を買い戻せ」と大騒ぎして投石やゴミ箱に火をつけるなど暴徒化した。競馬法の規則からも厳然たる態度を通せばよかったんだが、事態をおさめるためアナウンスの不手際を認めるかたちで返還が行われた。この件で川崎競馬は翌日から5日間、開催を自粛するに至った。

騒擾といえば川崎では昭和25年5月にも人気馬の除外による暴動が起きて二日間中止に。その年の関東オークスは9月に順延となっている。



# 1970年代

## 昭和45年～54年

1960年代から1970年代は佐々木竹見旋風が吹きつづけた。騎手デビューは昭和35年だが、瞬く間に頭角をあらわし、36年4位、37年3位、そして39年には初の南関東リーディング。以来15年間トップの座に君臨した。

45年3月には通算3000勝を達成。48年11月には4000勝、53年には5000勝とハイピッチで記録を打ち立て、5000勝達成セレモニーでは師匠の青野四郎調教師と共にオープンカーに乗って登場した。

競馬界の鉄人と称され59歳になる2001年まで馬上に身を置いた。

通算成績は7153勝という前人未踏の数字。それでも鉄人の149センチ、46キロの小柄な身体はケガとの闘いでもあり、昭和38年に右下腿骨折、50年に右肩脱臼、53年に右大腿骨骨折、56年に左大腿骨、左下腿複雑骨折、平成2年に肋骨骨折、8年に腰部骨折

と満身創痍の41年間だった。

昭和46年には馬流感が蔓延。乗馬クラブから広まるとされる流行で、最初に競走馬からインフルエンザの感染が判明したのが川崎競馬だった。たちどころに猛威を奮い、あっという間に交流のある他の南関東3場にも次々と罹患して、年末開催から翌年の2月末まで開催が休止や変更された。

大井の東京大賞典やアラブ大賞典は3月に順延となり、浦和のニューイヤーカーカップ、そして川崎記念も中止になった。

インフルエンザの爪痕は大きく、この時、佐々木竹見騎手には年間300勝の8年連続記録が懸かっていたが、開催中止で295勝でストップしてしまった。

川崎競馬には昭和54年、初めての女性ジョッキーが誕生した。19歳の安池成実さんである。

安池騎手は国内では4人目の女性ジ



ョッキー。デビュー戦は6月13日で、エリモフォーリーに騎乗し直線追い上げて5着だった。

父は安池保調教師。幼いころから馬は身近にいる環境で育ったが、初めて触ったのは高校一年生の時だったという。父の厩舎でアルバイトをしていると、大学に進学して通訳になりたいという将来の夢が揺らいできた。

どんどん馬に魅せられて騎手になることを決意。高校を卒業して短期騎手過程を受験した。全国から受けに来た21人のうち合格者は3人だけだったという。

すでに南関東には浦和に2歳上の土屋薫騎手がいた。女性騎手は競馬の華として重宝され、上山、水沢、新潟、金沢、福山、佐賀、益田と女性騎手招待が行われると騎乗しに遠征した。女性騎手は特別な存在だった。

「高校生の時から桑島騎手に憧れてい



たので、勝負服の星を色違いのピンクにしました。私が騎手になろうとした頃は女性の志望者は短期過程しかなかった。男性中心の世界だから施設的にも女性用の準備が何もなくて、控え室ひとつ作ってもらっても大変なこと。ずいぶん泣いたものです。女性騎手招待競走から帰ってくると特に風当たりも強くてね。右膝の靭帯を痛めた後遺症と、精神的な限界もあった」と579戦35勝という成績を残して60年6月に引退。

それでも魅力ある馬からは離れられず、結婚して子育てをしながら、厩務員、調教師補佐、そして現在は女性調教師として活躍している。



# 1980年代

## 昭和55年～平成元年

馬券の投票発売業務の機械化が進み、昭和56年には馬券のシングルユニット化が始まった。昭和57年には2号館が、翌年には1号館が完成し、新スタンドがオープン。

現在も使用されている1号館（1号スタンド）は地上5階、延べ床面積18,114㎡、収容人員は10,691人。アイボリーとグリーンのツートンカラーで、見やすく買いやすい競馬場へと装いを一新した。そのほかにも外向前発売所の設置や、南関東では初めての試みとなる船橋との相互場外発売を実施。3日間の場外で売上げは2億2,000万、入場者数は10,119人と好評だった。

一方で厳しい現実にも曝された。昭和59年に“川崎競馬存廃問題検討委員会”が発足したのである。低迷したとたんに存廃の窮地に立った。

前年の7月に伊藤川崎市長から「競馬廃止」発言が飛び出し、その諮問機

関として“川崎競馬存廃問題検討会”が設けられた。最終答申は、「あらゆる改善への努力をつくさないまま廃止を決めることは関係方面への深刻な影響や種々の問題を残すことになり、時期尚早といわざるを得ない。概ね3カ年改善策を講じた上で、その推移をみて決定する」という内容。「収益事業をとりまく諸情勢を総合的に判断して、基本的には廃止の方向を取らざるを得ない」といった結論に大きな衝撃を受けた。

反対した川崎競馬関係団体は井上宥蔵調教師会長を中心に20日間で10万人あまりの署名を集めた。川崎競馬ばかりでなく、地方競馬全体に深刻な影響を及ぼすおそれがあったのだ。

川崎競馬には3頭1着同着という珍しい記録がある。昭和61年8月20日第10レース新涼特別特別での出来事である。

川崎コースといえば、コーナーがき



つく、特に肝心の勝負どころで3コーナーのカーブが急なことから初めて騎乗したジョッキーが苦戦することでも知られている。そのためか直線の長さのわりに追い込みもきき、前半と後半の展開がガラッと変わるケースも多い。先行馬が有利な傾向がある地方競馬の中でも多様なレースが繰り広げられやすいということでもあるだろう。

ゴール前で横一線に並ぶ混戦は、馬券を握りしめているファンをいっそう熱くする。3着、いやこの時は4頭がビタリと横一線。長い長い写真判定の末、3頭が1着で同着、もう一頭がハナ差で4着と確定した。

1着が同着というレースは時にして起こるが、細かいスリット写真に目をこらしてもビタリと3頭が鼻面を並べて入線することは希有。逃げた佐々木竹見騎手のテスコカチドキ、3番手から最後迫った桑島孝春騎手のアーノルドフジ、そして直線外から追い込んだ

中地健夫騎手のトランスワンスター。それぞれにレースを進めていた3頭がビタリと馬体を併せたところがゴールだった。

「川崎はコーナーがきついぶん内に入ってしまうと不利も多いから、あの時はてっきり差されたかと思っていたよ」と佐々木竹見騎手がいえば、「いい手応えで勢いよく追い込んだからこれは勝ったと思ったんだが、まさか同着、しかも3頭とは驚いた」と中地騎手。

難コースならではのこの真夏の珍事は、記録と共に今でも語り草になっている。

昭和55年12月には芦毛だけが出走できるホワイトクリスマス賞が行われた。クリスマス開催にふさわしいとファンに喜ばれ、現在まで続いている。今では栗毛だけのゴールデンホース賞や、黒毛、黒鹿毛馬のくろうま賞など毛色による名物レースが定着しているが、その歴史は30年以上と意外に古いのである。



# 1990年代

平成2年～11年

平成2年3月3日、ロジータの引退式が行われた。集まった8000人の前に、相棒の野崎武司騎手を背にして現れたロジータ。直線をキャンターで駆け抜け、いつものゴム鞆のようなフックワークを披露して、別れを惜んだ。ファンからにんじんのレイをかけられ、母となるために故郷の高瀬牧場へと向かった。

8月には'90インターナショナル・レディース・ジョッキシリーズが実施され、川崎競馬場が皮切りの舞台になった。7日の第1戦はニュージーランドのマリー・リンドン騎手が、8日の第2戦では船橋の稲川由紀子騎手が1着となった。

そして平成7年5月7日、川崎競馬にナイター照明が点灯。待望のスーパーキングナイターが開幕した。

ナイターの愛称は公募され、スーパーキングナイターに決定。火花が散る、

きらめくといった意味があるという。オープニングセレモニーではシェイプアップガールズのショーと共に花火を打ち上げて開幕を演出した。

ナイター競馬は大井、旭川に次いで日本で3番目だが、川崎競馬場は会社帰りに立ち寄れる好条件にあり、住宅地に囲まれた立地のため、駐車場の増設や騒音対策、警備体制など地域住民との協調に時間を費やした。

足かけ4年で進められた計画により、照明の高さも14.25mと大井に比べてもやや低い照明灯が42本。1208個の電球が、一番明るいところでも2400ルクス、一番くらいところで1200ルクス。ルーバという網目状のものをかけて光の拡散を防ぐようにも気づかれた。ナイター照明に映えるようにと砂の色が白っぽい砂へと変更された。

正面には縦13m×横17.3mの大型スクリーンを設置し、馬場内をナイター



競馬にふさわしいものに有効活用。スタンド中央のトンネルをくぐると一面に広がる緑のターフとピアガーデン風のレストゾーンも整備された。

また、川崎競馬開設と共に歴史を刻んできた「外厩」がひっそりと姿を消したのもこの頃。

川崎競馬場周辺の住宅街を歩くと突如としてあらわれる馬の姿。そこには厩舎が置かれ、川崎競馬の「外厩」として馬房が並び、調教師や騎手、厩務員の生活の場としても存在していた。マンションと居る木造厩舎は異空間でありタイムスリップしたかのような風情があったものだ。

朝の調教は馬を引いてアスファルトの住宅街を歩き、車が行き交う道路を横切るようにして競馬場に向かう。古くは数厩舎あったというが、近年は岩本亀五郎、長谷川蓮太郎の2厩舎のみとなり、岩本厩舎が解散してからは長谷

川蓮太郎厩舎だけが外厩として残っていた。

川崎競馬は昭和25年の1月に始まったが、前身にあたる戸塚競馬とは約10ヶ月の間、平行して開催されていたこともあって、競馬場付近の個人の所有地に厩舎を建て、そこから競馬に向かうこともあった。厩舎を一つの地区にまとめて管理しようとする考え方がなかったおおらかな時代のなごりである。

全盛期には小向の厩舎群で開業する調教師は74名いた。馬房不足は窮地にあり、それを補うかたちで外厩が認められてきた。

ところが、川崎所属調教師の数は年々減り、空き馬房が出るようになったことで長谷川蓮太郎厩舎も小向へと引越す。警備員の配置や馬場の整備などかかる経費も多く、外厩はその役割を終えたのである。



# 2000年代

## 平成12年～

新世紀がスタートすると、まず4月にはこれまで川崎競馬を主催してきた神奈川県と川崎市が一部事務組合として新たに構成されて「神奈川県川崎競馬組合」が発足した。

翌年の1月には29年ぶりに正月開催を実施。川崎大師への初詣や箱根駅伝などがあることから制限されていた警備などの問題をクリアにして川崎競馬は正月のにぎわいを取り戻した。アドバルーンを掲げて開催告知するなど盛大にアピールした。

地方競馬の低迷が続き、廃止される競馬場も出てきた事態に対して、時の大山勝副管理者が「聖域なき見直し」のスローガンを掲げて経営改善検討会議を立ち上げたのは平成13年6月のこと。

「この世情で大幅な売り上げ増は見込めないなか振興策を図らなければならない。それともうひとつの視点がコストの縮減であり、いかに減らすかをこ

うじなければならない。改善すべき点はどこか。そこで、検討会議では川崎競馬に関わる各団体の代表者に集まっていたいただきました」と大幅な組織改善や経費削減、不採算日カットへの取り組みなど大ナタを奮った。翌年にはさっそく「前年比プラス」という結果を出している。

平成13年7月8日をもって引退した佐々木竹見騎手の7153勝の軌跡を展示した「竹見ギャラリー」をオープンさせると、15年1月には第1回佐々木竹見カップ・ジョッキーズグランプリを実施。中央も含めた全国のトップジョッキーが佐々木竹見さんの元に集まってグランプリを競う熱戦の聖地となった。第1回は浦和の見沢譲治騎手が優勝し賞金200万を手にしたが、平成24年の現在まで10回を数えるに至っている。

平成18年にはダートの祭典JBCの舞台として名乗りをあげた川崎競馬。それまでの「JBCは一日に2つのG I」



を覆し、距離を1600mにしたJBCマイルを11月2日に、JBCクラシックを3日という新たな形態でダートの祭典を盛り上げた。

JBCマイル優勝したのはブルーコンコルドで連覇達成。2着メイショウバトラー、3着リミットレスビッド。JBCクラシックは勝ち馬タイムパドックスが前年に続き連覇達成。2着シーキングザダイヤ、3着ボンネビルレコードという結果だった。

平成21年にはキングビジョンを全面改修して、世界最大面積1152㎡を有する川崎ドリームビジョンを設置。世界最長のスクリーンとしてギネス世界記録に認定された。

最大3画面を使って映像やオッズを表示。開催パターンにあわせて多彩に表示を行うことができ、1コーナーと3コーナー走路のすぐ近くにリモートカメラを設置することにより、これまでになかった臨場感あふれるレース映像が大

画面いっぱい映し出されるようになった。

平成22年3月11日、太平洋三陸沖を震源とした東北地方太平洋沖地震が発生。南関東競馬は休場となったが、騎手や調教師等によって被災地への募金活動が行われ、復興支援競馬として約1ヶ月ぶりに川崎競馬から再開した。

平成23年12月にはウインズ川崎がオープン。

川崎競馬場がJRAの場外馬券場となり中央開催時の勝馬投票券の発売、払い戻しを行うことになった。地方競馬場でのJRAの馬券発売はすでに盛岡や佐賀、姫路でも実施されているが、JRAから職員が派遣されるのではなく、川崎競馬組合に発売、払い戻し業務を委託する新たなケース。

そして平成24年10月からは、JRAのインターネット投票（IPAT）を使って地方競馬を発売するという画期的な試みがスタートしている。



# 神奈川県競馬小史

- 大正12年12月 県内8つの畜産組合により春秋二回の競馬会を開催  
(平塚、藤沢、厚木、松田、小田原、大船、登戸、三横)
- 昭和8年 大船競馬場が戸塚吉田町に移転
- 昭和10年 軍馬の鍛錬育成施設として戸塚汲沢町に馬場を設置
- 昭和16年 太平洋戦争勃発。戸塚吉田町の競馬場が軍需徴用され中止へ
  
- 昭和21年秋 1000mに改修された戸塚汲沢競馬場で戦後初の競馬開催
- 昭和23年7月 競馬法の一部改正により、地方競馬が公営競技となる
  - 9月 戦災復興指定都市の開催権が横浜市に認可(年4回)
  - 10月 公営競馬としての第1回県営戸塚競馬開催
  - 10月 戦災復興指定都市の開催権が川崎市に認可(年4回)
  - 12月 戦災復興指定都市の開催権が平塚市に認可(年2回)
- 昭和24年8月 戸塚競馬場にて地方競馬初の血種別競走の実施
  - 10月 神奈川県は川崎市富士見町、旭町、宮本町の一部に川崎競馬場を俵川崎競馬倶楽部に建設させ、10月の県会の議決を得て買収(買収代金・153,692,939円 土地面積・約6万坪)
- 昭和25年1月 川崎競馬場竣工
  - 第1回県営川崎競馬を開催。開催日 1月25日・26日、1月28日・29日、2月1日・2日(入場人員・51,422人 売得金・82,150,200円)
- 昭和26年11月 川崎から中央に移籍したキョフジ号がオークスを制して地方出身初のクラシック馬となる
  - 11月 小向練習場での競走馬への調教を開始した
- 昭和28年11月 川崎競馬場第一馬見所火災により焼失
- 昭和29年3月 川崎競馬場第一馬見所及び付属施設(呼称は特別観覧席)完成
  - 12月 売上げ減により昭和25年10月から休止していた戸塚競馬場を廃止した
- 昭和32年3月 神奈川県は川崎競馬場を7億円で株式会社関東レース倶楽部(現 株式会社よみうりランド)へ売却し、以後開催の都度、競馬場を借上げ使用し現在に至る
- 昭和34年3月 1号館完成
- 昭和36年3月 騒じょう事件のため3月2日から5日間開催中止
  - 第1・第2投票所完成
  - 10月 暴風雨のため10月10日開催中止
- 昭和37年4月 競馬法の一部改正により、昭和38年3月31日付をもって開催権が県と川崎市となる。ただし経過規定により横浜・平塚市の開催権が3年延長(昭和40年3月31日まで)
- 昭和39年3月 (社)神奈川県馬主協会事務所完成(R・C造2階建 延204.0㎡)
- 昭和40年3月 3号Aスタンド(R・C造4階建)完成
  - 3月 横浜・平塚市の開催権が経過規定の延長からさらに3年間認められた(昭和43年3月31日まで)
- 昭和41年3月 3号Bスタンド(R・C造4階建)完成
- 昭和43年2月 降雪のため2月16日開催中止

- 昭和45年3月 横浜・平塚両市の開催権が指定切れとなり、4月から神奈川県と川崎市が開催権を取得した
  - 4月 東京都が開催権を放棄、これにより開催回数が1回分増(川崎市営分として)、以後県営10回、川崎市営5回、計15回となる
  - 4月 横浜市中区宮川町にあった場外馬券売り場の廃止
  - 4月 連勝単式投票法を廃止し、全レース8枠制連勝複式投票法を採用
- 昭和46年3月 3号Cスタンド(R・C造4階建)完成(3号A・B・Cスタンドを合わせ3号館と呼称)
- 昭和47年1月 馬インフルエンザ集団発生のため2開催延11日間の開催中止
  - 4月 厩舎改築6馬房14世帯完成
- 昭和48年9月 厩舎管理体制強化のため小向きゅう舎駐在事務所を設置
  - 11月 佐々木竹見騎手4000勝達成
- 昭和49年2月 騎手調整ルーム(R・C造4階建)完成
  - 4月 交通ゼネストのため4月11日開催中止
  - 8月 厩舎改築28馬房16世帯完成
- 昭和50年2月 降雪のため2月11日開催中止
  - 11月 厩舎改築53馬房36世帯完成
  - 11月 単勝・複勝式にトータリゼータシステムを採用
- 昭和51年4月 神奈川県調騎会が調教師会と騎手会に分離
  - 10月 厩舎改築69馬房19世帯完成
- 昭和52年4月 厩舎改築40馬房11世帯完成(改築分計10棟196馬房96世帯)
  - 5月 騒じょう事件のため5月12日から2日間開催中止
- 昭和53年3月 連勝複式を知らせるテレホンサービス開始
  - 6月 佐々木竹見騎手が通算5000勝を達成
- 昭和54年3月 300窓にユニット券方式を導入
  - 連複投票所の一部機械化稼働(3号館と新設の第11投票所)
  - 6月 川崎競馬第一号女性ジョッキー安池成実騎手デビュー
  - 8月 中地英夫騎手が調教中の転倒事故により死亡
- 昭和55年6月 第1・2投票所を増設し投票業務を機械化に。これにより投票業務はほぼ全面機械化となる
  - 12月 芦毛馬のホワイトクリスマス特別競走実施
- 昭和56年4月 1・2号館の建て替え工事着工(昭和58年12月完成予定)
- 昭和57年10月 投票業務全面機械化シングルユニット方式へ
- 昭和58年2月 2号館(R・C造5階建)完成
  - 12月 中央競馬から4名の騎手を招いて特別招待レース実施
- 昭和59年4月 1号館(R・C造5階建)完成。新スタンドオープン
  - 10月 投票窓口全面シングルユニット化完成
  - 川崎競馬存廃問題検討委員会が発足
- 昭和60年12月 戸塚記念で南関東2度目の重賞1着同着(エアハート号とヨネジロウ号)
- 昭和61年8月 外向前発売所オープン
  - 新緑特別で日本競馬史上初の3頭同着(テスコカチドキ号、アーノルドフジ号、トランスワンスター号)
- 昭和61年10月 川崎競馬関係団体が、存廃問題検討委員会の最終答申に反対し、20日間で10万





- 万人余りの署名を集めた
- 昭和62年2月 佐々木竹見騎手6,000勝達成
- 昭和63年2月 船橋競馬・川崎競馬相互場外発売開始
- 昭和64年1月 昭和天皇崩御のため1月8日～12日の開催を中止
- 平成元年2月 5日目7Rでサラ系C級1600m競走で9頭が馬番順にゴールイン
- 5月 浦和競馬・川崎競馬相互場外発売開始
- 10月 初心者向け女性乗馬教室を開講。講師は川崎所属騎手
- 11月 ロジータ号が牝馬として初の南関東三冠馬となる
- 平成2年1月 佐々木竹見騎手、平成元年プロスポーツ功労賞受賞
- 1・2月 川崎競馬40周年記念行事実施
- 3月 ロジータ号引退式を実施。北海道・高瀬牧場で繁殖牝馬に
- 8月 インターナショナル・レディース・ジョッキーシリーズ競走を実施。川崎が皮切り
- 11月 払戻業務電算化、マルチユニット投票券導入
- 12月 三冠馬ロジータ号の功績を讃えロジータ記念を新設
- 平成3年2月 馬場正面大オッズ板完成(オッズ、払戻、着順表示)
- 12月 佐々木竹見騎手6,500勝達成
- 平成5年1月 シンボルマークならびにマスコットキャラクター「かつまるくん」が決定
- 4月 山崎尋美騎手1,500勝達成
- 9月 川崎2人目の女性騎手、戸川理彩騎手がデビュー
- 12月 山形県上山競馬場及び松山場外において、場外発売開始(上山競馬場冬期休業期間)
- 平成6年2月 12・13日降雪のため開催中止
- 3月 上山競馬騎手招待レース実施
- 7月 馬場内投票所(M1)及び、馬場内連絡通路完成
- 10月 重賞競走の前日前売を開始
- 平成7年3月 県有地に立体駐車場完成
- ナイター照明設備、大型映像装置(スーパースクリーン)、馬場内投票所(M2)及び馬場内駐車場完成
- 5月 第1回ナイター競馬(スーパーキングナイター)を開催
- 一部投票所をマークカード化
- 9月 17日台風のため開催中止
- 11月 全投票所マークカード化、自動払戻機15台設置
- 平成8年1月 井上有蔵調教師がスポーツ功労者文部大臣表彰を受ける
- 4月 枠番連勝単式及び馬番連勝複式投票法導入
- 電話投票法導入
- 5月 井上有蔵調教師が黄綬褒章を受章
- 平成9年4月 2号スタンド(SRC一部RC造4階建)完成
- 6月 タートグレート競走(統一グレート)導入により、川崎記念競走がGⅠ競走、エンブレス杯競走及び全日本3歳優駿競走がGⅡ競走に格付される
- 10月 馬番連勝単式投票法導入
- 中型映像装置完成
- 平成10年1月 インターネット(川崎データバドック)・ファクス・オッズプリンターによる情報サービ

- ス開始
- 9日降雪のため開催中止
- フルゲート14頭立競走実施
- 平成10年7月 佐々木竹見騎手7,000勝達成
- 7月 全レース馬番連勝単式発売実施
- 8月 ながし・ボックス馬券実施
- 平成11年3月 佐々木竹見騎手世界第5位の記録7,058勝達成
- 平成12年4月 川崎競馬組合発足
- 平成13年1月 29年ぶりに正月競馬を開催
- 27日、降雪のため開催中止
- 4月 新種馬券ワイド(拡大馬番号連勝複式)を導入
- 森下博騎手2000勝を達成
- 7月 佐々木竹見騎手が8日第10レース・ラストラン競走を最後に引退。生涯成績39092戦 7153勝(中央2勝を含む)で世界歴代6位
- 経営改善に向け「川崎競馬経営改善検討会議」を設置
- 8月 台風15号の影響により小向練習馬場が冠水
- 10月 日本初のフィリピン産馬が川崎競馬場でデビュー
- 11月 川崎競馬の歴史と共に歩んできた外厩の廃止が決定(12月4日、長谷川蓮太郎厩舎が小向厩舎群に移転)
- 12月 同馬同騎手による2連続同着優勝。(イソエイイーグル号、プリンセスガーデナー号)
- 平成14年3月 「川崎競馬経営検討会議」からの提言を受け、経営改善実施計画を策定
- 4月 新種馬券(三連勝単式、三連勝複式)を導入
- カツマルくん生誕10周年
- 佐々木竹見記念ギャラリー開設
- 7月 10日、台風接近のため開催中止
- 12日第10レースで三連単8,833,250円の(1241番人気/1320通り)の超高配当飛び出す。総投票数359,075票中、的中票数は3票。また、三連複でも1,654,820円の高額配当(216番人気/220通り)で総票数89,692票のうちの中票数は4票。日本最高配当記録
- 8月 12日～ナイター時間の延長
- 「光の馬ロジータ イルミネーション」設置
- 11月 14日～ナイター期間の拡大
- 12月 沖野耕二騎手2000勝達成
- 平成15年1月 三連複で547万馬券飛び出す！勝ち馬はコスモフレイズ、2着はセカンドベスト、3着はローランドウッキー
- 第一回佐々木竹見カップの実施。浦和競馬の見澤騎手が優勝
- 1号館2階の食堂街が「まんぶく横丁」としてリニューアル
- 3月 全国初の3月ナイター開催(3月27日～)
- 4月 特別観覧席リニューアル。1号スタンド4階は禁煙となり、ゆったりサイズのシングル席と格安価格のグループ席(6人用・9人用)設置
- 南関東4競馬場共同ホームページの運用及びインターネット投票(SPAT4)を開始
- 5月 関東オークス(GⅢ)が牝馬戦線の頂点レースに昇格



- 平成15年6月 世界最大！大型映像装置『キング・ビジョン』新設  
下見所の映像装置が「パドック・シアター」としてリニューアル
- 平成16年1月 森下博騎手が日本プロスポーツ大賞功労賞に輝く
- 2月 酒井忍騎手1000勝達成
- 7月 金子正彦騎手1000勝達成
- 平成17年5月 SPAT4でネットバンクサービスを開始
- 平成18年1月 町田騎手が日本プロスポーツ大賞新人賞に輝く  
オリビエ・ペリエ騎手に短期免許(期間は1月21日～2月20日)。所属は山崎尋美厩舎
- 6月 関東オークスを制して、チャームアスリープ史上初の牝馬三冠達成  
川崎競馬場1号スタンド4階に新ボックス席を設置し、特観席・指定席券売場を2号スタンド1階に移設
- 8月 森下博ジョッキー2500勝達成
- 9月 今野忠成ジョッキー1000勝達成
- 11月 川崎初のJBC競走開催(2日スプリント、3日クラシック)
- 平成19年1月 3年ぶりに正月競馬を開催、以後、正月開催が固定化
- 5月 今野騎手の長年の児童養護施設への寄付に対して、神奈川県知事より感謝状が贈られた
- 8月 馬インフルエンザが8月18日 が発生し大井競馬が8月18日、9月2日の開催中止。  
馬の移動禁止などの措置がとられた
- 10月 カツマルくんカードを導入
- 平成20年4月 1号スタンドにファン休憩所「スパーキングルーム」とキッズルーム「キッズカツマル」  
(名称公募)を開設
- 7月 特別観覧席及び指定席の予約システムを導入
- 10月 川崎競馬公式WEBサイト開設
- 11月 川崎所属騎手のみで実施する川崎ジョッキーカップ施行
- 12月 今野騎手が長年の社会貢献により「まちかどのフィランソピスト賞」受賞
- 平成21年6月 キングビジョンを全面改修し、世界最大表示面積1152㎡を有する川崎ドリームビジョンの運用開始
- 12月 第10回開催を初のセミナイターとして実施(最終レース19:40)
- 平成21年1月 開設60周年記念「新重賞用ファンファーレ」の作成
- 3月 競馬場内の禁煙化(指定された喫煙所等では可能)
- 5月 個人協賛レースの募集の開始
- 7月 川崎ドリームビジョンが世界最長スクリーンとしてギネス世界記録に認定！
- 平成22年3月 東北地方太平洋沖地震の被災地へ川崎競馬の騎手・調教師が募金活動。南関東は開催中止に
- 4月 1ヶ月ぶりに南関東競馬再開し、復興支援競馬の開催
- 7月 システム障害により川崎競馬開催中止(8日)
- 12月 川崎場外ジョイホース横浜オープン
- 平成23年12月 ウインズ川崎のオープン。日本中央競馬会勝馬投票券の発売開始(3日)
- 平成24年2月 降雪により川崎競馬開催中止(29日)
- 10月 JRAインターネット投票(IPAT)で地方競馬を発売開始

# 川崎競馬を 熱く駆け抜けた 名馬たち

- キヨフジ
- リュウトキツ
- ファインポート
- シャドウ
- ミルコウジ
- ダイタクジーニアス
- ロジータ
- カシワズプリンセス
- ドルフィンボーイ
- インテリパワー
- ダイヤモンドコア
- エスプリシーズ
- モエトレジャー
- ロッキーアピール
- 川崎のアラブたち



# キヨフジ

1948年生  
父 クモハタ  
母 リガーユートピア(ミラクルユートピア)

戦績:83戦23勝

主な勝ち鞍:オークス、川崎記念、中山牝馬特別、ワード賞

調教師:八木正雄 主戦騎手:八木正雄



昭和23年5月28日に生まれたキヨフジは3歳(現表紀2歳)抽選馬として45万円で取引され、八木正雄調教師の元にやってきた。父は伝貧性貧血で殺処分されてしまったクモハタ。牝系は英国からのもので、のちにホスピタリティを輩出し、今もその枝を広げ続けている。

「女馬とは思えない馬だね。横を向いてスタートしようが、出遅れようが、最後はぶちぎってゴールしたものだ」。キヨフジの騎手であり、調教師でもある八木調教師が語った。まだ騎手と調教師が兼業だった時代の話である。

昭和25年、戸塚競馬場が閉鎖され、現在の川崎競馬へと移行したこの年、彗星のごとく現れたスターがキヨフジだった。

8月11日、八木正雄騎手を背に鮮やかに逃げ切ってデビュー。20戦した時点で10勝をあげ、3着を外すことはなかった。中央との垣根が低く行き来が盛んだったこともあって、キヨフジは中央入りし4歳のまるまる1年を過ごした。オークスを制して地方出身馬初のクラシックホースになった。

再び川崎に戻ると、いきなり第二回川崎記念を勝って凱旋レースを盛り上げた。61キロのハンデを背負っても走り続けた。このへんが女丈夫たるゆえんである。

83戦23勝の戦績を残して母となったキヨフジはけっして恵まれたわけではなかったが、奇しくもひ孫に当たるスターライヒ、ガールライヒは姉妹揃ってキヨフジ記念の覇者となっている。

「いつかまた、キヨフジのような馬に出会いたい。そう思いながらこの年になってしまったよ」と言って、かつての恋人を思い出しているかのように語っていた八木正雄調教師。平成21年11月24日に92歳で逝去されるまで現役を貫いた。日本競馬史に残る最高齢記録である。

キヨフジ記念はのちにキヨフジ記念エンプレス杯と改称され現在も続いている。

女丈夫と呼ばれた  
キヨフジ

# リュウトキツ

1967年生  
父 フイリユース  
母 玉竜(カツフジ)

戦績 31戦10勝

主な勝ち鞍 川崎記念、東京ダービー、東京王冠賞、東京盃、報知オールスターC

調教師:新貝一雄 主戦騎手:佐々木吉郷



昭和40年代の川崎を代表する名馬リュウトキツ。東京ダービー、東京王冠賞を勝って二冠馬となった昭和45年には東京大賞典のファン投票で第1位に選出された。第1コーナーで大きな不利があり結果は4着だったが、不本意だった暮れを一蹴するかのよう年明けの川崎記念では馬なりで先頭に立つと5馬身ぶちぎりの圧倒的強さ。レコードタイムをコンマ7秒詰めるオマケ付きだった。

「利口な馬だね。調教の時なんか『こっちに来い』と呼ぶと人が乗りやすい位置

まで横歩きしてくるんだ(笑)。大跳びで、一瞬の脚がもの凄いい。3コーナーでちょっと仕掛けると周りの馬が止まっているようだった。馬なりで15馬身差というレースをしたこともあった」と新貝一雄調教師がリュウトキツの魅力を語った。

「ただね、あの頃、全国的に馬流行性感冒が蔓延。川崎は特にひどくて、リュウトキツも高熱が続き、栄養が回らなくなってしまった。その影響が尾を引いてその後は良い成績を残せなかった。種馬にもなったが、外国からどんどん種牡馬が輸入されていた時代で成功はできなかったね」。

昭和46~47年の馬インフルエンザ集団発生では川崎記念が中止になるなど川崎では2開催延べ11日間が開催中止となった。

リュウトキツの手綱をまかされたのはこの時代のスタージョッキー佐々木吉郷騎手。「大きくて脚が長く、お世辞にもかっこいい馬ではなかったから最初は期待していなかったんだが3、4戦と使っているうちに馬が変わってきた。スタートが上手でピタッと好位で折り合う。このあたりから動こうとこっちが考えているのをわかっていて自分からハミをガッと取って上がっていく。ちょうど騎手をやめようか迷っていた時期に出会った馬だったからリュウトキツの引退が決まったときには気が抜けてしまった」とステッキを置く決意をさせた最高の相棒だったという。

馬インフルエンザに泣いた  
晩年リュウトキツ



# ファインポート

1973年生  
父 シブリアニ  
母 リーディングパート(ガバドール)

戦績:21戦11勝

主な勝ち鞍:東京大賞典、NTV杯、戸塚記念

調教師:井上宥蔵 主戦騎手:竹島春三

世界レコードで駆け抜けた  
ファインポート

昭和51年12月30日。暮れも押し迫ったこの日は第22回東京大賞典が大井競馬場で行われていた。

人気を分け合ったのは東京王冠賞1、2着プラスワンとファインポート。中央ではトウショウボーイ、テンポイント、グリーングラスさらにはマルゼンスキーと凌ぎを削っていた世代。南関東でも中央に劣らず4歳(現表記3歳)が台頭していた。

生粋の逃げ馬はただ一頭。「テンの速さはわかっていただけだと思っていた」と竹島春三騎手。ゲートが開いて飛び出したのは案の上ファインポートだった。

ファインポートは11月の中央騎手招待でもまんまと1800mを逃げ切ってレコード勝ちしてただけに自信みなぎる手綱は5馬身、6馬身、8馬身と後続にグングン差を広げていく。直線を回ってプラスワンが追いついてきたときには時すでに遅し。ファインポートはゴール目前にいた。

3000mだった当時の東京大賞典。ファインポートが弾きだしたタイムは3分8秒6。この年の菊花賞で優勝したグリーングラス3分9秒9。芝さえ上回る驚愕タイムは世界レコードとして今も記録されているという。そのほかにも2000mのNTV盃など生涯5つのレコードを塗り替えた。

「自分でペースを作った価値ある世界レコード。それならぜひダートの本場アメリカで走らせてみたいと計画が進んでいた矢先に靭帯を痛めてしまってね。残念でならなかった。種牡馬にもなったが女嫌い。唯一栗毛だけは好きだった(笑)。しかし精虫数が少なくて成功できなかったね。そのわずかに残された血の中から、皮膚薄さや筋肉の柔らかい馬体がよく似た孫ダイヤモンドコアが誕生し活躍してくれたのはうれしい」と井上宥蔵調教師は語った。

1988年には種牡馬を引退したが、少ない産駒からマイネルムート(新潟3歳S馬)、グレイスタイヤン(東京3歳優駿牝馬)、リキポート(高崎ダービー)、ファインオー(サラブレッド大賞典)等を出した。

# シヤドウ

1978年生  
父 ウエンセスラス  
母 レツドシヤドウ(バーバー)

戦績 29戦6勝

主な勝ち鞍 桜花賞、関東オークス、報知オールスターC、キョフジ記念

調教師:高橋正豪 主戦騎手:橘 真樹



シヤドウは昭和54年に桜花賞、関東オークス、報知オールスターC、キョフジ記念と四冠を制した名牝である。さらには母として羽田盃馬カシワズプリンセスを生むなどの活躍。しかし、「シヤドウには名牝という言葉が似合わない」。関係者の誰もがそう口を揃えた。

まずは400キロソコソコの小さな馬体。「幅がなく薄っぺらなで見た目のよくない馬だ」と高橋正豪調教師は青森の山内牧場で初めてシヤドウを見た時にそう思ったという。

そして激しすぎる気性。「いやあ、この馬には本当に苦労した。とにかく気性が激しくて、鞍を乗せると暴れ、人が近づくと噛みつこうとする。馬体が柔らかいぶんだけタチが悪くてクルッと回って人を噛む(笑)。蹄が弱く崩れてしまうので頻りに蹄鉄を打ちかえることができない。クギの本数を少なくする工夫をし、普通の蹄油ではなく馬油をガーゼに浸して蹄にすり込む。レース前にはこの作業をひと晩中続けた。手間がかかったことで、別の意味で“人馬一体”を感じさせてもらったけど」と他人には任せられなくて高橋調教師みずから調教もつけていたという。

調教馬場まで行くにも前田厩務員と下モ内厩務員の二人がかり。そして担当していた奥原諫人獣医師も手を焼いたひとり。「きつくてね。カイバは食べない。注射はさせない。白衣を見ただけで暴れるもんだから、わざわざ着替えて近づこうにしていた」と関係者の口から出るのはおてんば伝説ばかりだが、奥原獣医師はこう続けた。「でも、心臓の状態と調教での動きがピッタリと合う馬でね、だから治療そのものはやりやすく、仕上げの調整がしやすかった」。そのあたりがシヤドウ活躍の秘密だったのかもしれない。

シヤドウの得意技は追い込み。小柄な馬体からはイメージできないような切れ脚で直線を突き抜けた。「忘れられないのは桜花賞。舞台となる浦和のマイルは外枠が不利なのはわかっていたが、何しろゲートが悪かったもんだから大外発走にしてもらわしかなくてね(高橋師)と不安材料だらけで桜花賞へと向かったが、4コーナーまで馬りのまま上がってきて直線では大外一気でごぼう抜きだったという。

大外一気の鬼脚  
シヤドウ



# ミルコウジ

戦績：8戦4勝

主な勝ち鞍：東京ダービー

調教師：津久井巖 主戦騎手：本間茂



わずか8戦4勝。ミルコウジの競走生活はとても短いものだった。ミルコウジは生まれながらに脚が曲がっていた。「脚が曲がっていて難しいがやってもらえないかと牧場の人に勧められてね。両ひざ下は明らかに曲がっていた。右が外向いて、左が内向。削蹄で何とか調整するしかないと考えてた。初めて馬を持つオーナーにその話をしたらそれでも欲しいと言ってくれてね。それも幸運な巡り合わせだった。510キロくらいあって全体に大きい上にこの脚だから怪我でもさせ

たら厄介なことになると、調教にいくにも三人体制。一人が乗って二人が引いていく。ごく軽く、長いところを普通の馬の倍時間をかけて乗ったもんだ。5月から6月に持ってきたんだけどデビューできたのは10月だった」と津久井巖調教師は曲がった脚と正面から向き合った。

デビュー戦は2着。生涯成績は8戦しかしていないが、4勝、2着4回と一度も連対を外さなかった。「馬場に行くまではピョコタンピョコタンしてるんだけど乗り出すとシャキーン。首をグッと下げたいい飛びしてるんだ。黒潮盃ではマルゼンアディアルに負けた。前と6馬身あって、後ろとも3馬身。ミルコウジは羽田盃を自重して東京ダービーへ目標を絞ることにした。その羽田盃ではマルゼンアディアルが圧勝したんだが、その後故障してしまった。あの馬が無事だったら東京ダービーで優勝することはできなかったと思う」。

東京ダービーでは二番人気。逃げるセンシブルを圧倒的な一番人気のマリンボーイが追いかける展開。ミルコウジは3コーナーから並びかける。3頭の勝負になった直線で一杯になった2頭をあっさり交わしてゴールした。ところがレース後に骨折していることが判明。東京ダービーを一瞬の輝きにして、そのまま種牡馬に転向することが決まった。

早々に種牡馬になったミルコウジは大成功。東京大賞典馬ホワイトシルバーや東京ダービー馬セントリックなどを出し、サイヤラングではリーディングに立つ偉業も残した。

種牡馬としても  
大成功したミルコウジ

1982年生  
父 ミルジョージ  
母 センターガーデン(Lassalle)

# ダイタクジーニアス

戦績：37戦9勝

主な勝ち鞍：浦和記念、キヨフジ記念、報知オールスターC、東京プリンセス賞

調教師：鳥飼春弥 主戦騎手：佐々木竹見

1984年生  
父 ミルジョージ  
母 グリーングツドリー(グツドリー)

鉄人が惚れ込んだ女傑  
ダイタクジーニアス

「あの時のこと考えると興奮がよみがえってくるよ。そりゃ、もうもの凄手応えだった。1番忘れられない牝馬」と佐々木竹見さんが昨日のレースのように話してくれた。ダイタクジーニアスの勝った報知オールスターCの話である。「400キロちょっとの華奢なからだでね、気性は激しいんだけど、それがレースに行くとか闘争心をむき出しにするわけ。デビュー前から調教にもまたがっていたんだが、だんだんと差す競馬を教えていった」と教育係が竹見さんという幸せ者。鉄人の導きもあって頭角を現し、クラシックでは東京プリンセス賞を勝った。古馬になってからも充実。ますます力をつけてキヨフジ記念を制し、浦和記念ではトミヒサダンサーと同着で優勝を分け合った。

語り草になっているのが報知オールスターカップ。この年、巷の話題はロジター色。牝馬ながらに羽田盃、東京ダービーを勝ち、秋の第三冠を目指して重賞5連勝の勢いで真夏の古馬重賞にぶつけてきた。前年のウインドミルやミハマシャーク等、牡馬一線級もいる。大方の予想通りロジターが直線で先に立ち、決まったかと思ったゴール前、外からすっ飛んできたのがダイタクジーニアスだった。初めて挑んだ古馬戦で土が着いたロジターとの差は1馬身。なんと最強牝馬をねじ伏せたのである。

鉄人に見込まれた素質を武器にその後中央入りしたがチャンスを手にはすることはできず、再び古巣に戻ったが3戦後には母となる道へ進んだ。

ダイタクジーニアスの二番仔ナイーヴアポロンは母と同じ鳥飼春弥厩舎へ入厩し鉄人の元へやって来た。重賞こそ勝てなかったが、京浜盃ではキャニオンロマンの二着、準重賞ゴールデンステッキで優勝している。



# ロジータ

1986年生  
父 ミルジョージ  
母 メロウマダング(マダング)

戦績：15戦10勝

主な勝ち鞍：川崎記念、東京大賞典、東京ダービー、羽田盃、東京王冠賞、桜花賞、京浜盃、ニューイヤーC

調教師：福島幸三郎 主戦騎手：野崎武司



JBC開催に行われる第23回ロジータ記念。ロジータとは川崎から誕生した伝説の最強牝馬。

ロジータは平成2年の川崎記念を最後に引退し、同年12月には第1回ロジータ記念が実施され、今年で23回を数える。

3歳（現表記2歳）秋にデビューしわずか1年半という短い競走生活の中に15戦10勝。牝馬ながらクラシック三冠達成という偉業に比べ、川崎記念、東京大賞典、桜花賞、京浜盃、ニューイ

ヤーCと8つのタイトルを独占した。

「3歳（現表記2歳）の6月でしたが、ロジータが初めて馬場に入った日を今でも思い出します。トモがカンガルーみたいにバナがあって、あの馬は何だ？と聞いてくる調教師さんもいたほどでした」とロジータの育て親である福島幸三郎調教師。均整の取れた馬体はすぐに厩舎内でも話題になったという。

「15戦走ったうちの13が重賞レースだったね。母親メロウマダングもうちにいた馬で、新馬戦をレコード勝ちしたほど速かった。二戦目でレコードを自分で塗り替えたんだがそのスピードが仇になって脚を悪くして早くに繁殖に上がった。それに比べて娘のロジータは脚元に不安が出たこともなければカイバ食いの心配をしたこともない。欠点のない馬だった。どこからでもレースができたし、負けたレースがあっても、同じ負け方は二度しない。悔やまれるのは中央遠征だね。あれは万全の体勢で出走させてあげたかった。そのあとの東京大賞典を馬なりに勝ってしまったんだから。今のように交流が盛んではなかったし、生まれてきた時代が少し早かったんだね」。翌年の川崎記念を優勝して惜しまれつつ引退。母となった。

すでに26歳となり繁殖生活も引退したが、母としてイブキガバメント（朝日杯CC）、カネツフルーヴ（川崎記念・帝王賞）、アクイレジア（JDD②）等を出し、孫にはレギュラーメンバー（JBCクラシック・川崎記念）等と血のドラマは続いている。

川崎が生んだ最強牝馬ロジータ

# カシワズプリンセス

1989年生  
父 ロイヤルスキー  
母 シヤドウ(ウエンセラス)

戦績：16戦8勝

主な勝ち鞍：羽田盃、京浜盃、黒潮盃、東京3歳優駿

調教師：高橋正豪 騎手：高橋三郎、野口睦三

母の夢を叶えた  
女傑二世カシワズプリンセス

南関東を闊歩した女傑シヤドウの娘としてデビューから注目を浴びていたカシワズプリンセス。その期待に応えるかのようにデビューから4連勝。さらには東京3歳優駿をスイスイと逃げ切った。カミソリのような切れ脚が身上だった母とは違って先行型。そのスピードに母が叶わなかった牡馬クラシック制覇の夢が懸かっていた。

先行争いに巻き込まれた全日本3歳優駿では2着だったが、その弾むようなフットワークからも『ロジータの再来』と称された。陣営は牡馬へ挑むことを選択し、ステップレースの京浜盃へ向かった。1992年の春、この年の最有力と目されていたのが青雲賞馬（現在のハイセイコー記念）ナイキゴージャス。ナイキを直線あっさり捕らえると突き離すこと6馬身圧勝。牝馬とは思えない力強さで駆け抜けた。つづく黒潮盃でも難なく優勝して、堂々クラシックに勝ち名乗り。そして臨んだ第一冠の羽田盃。ここでもナイキゴージャスをふり切ってゴール。母の成し得なかったクラシック制覇を遂げた。

ロジータを上回る好タイムで第一冠を制したこともあってますます注目を集めることになり、東京ダービーでは牝馬ながらに圧倒的一番人気。

しかしながら、「緑の帽子カシワズプリンセス、カシワズプリンセスはまだ、まだ中団位～！」とあと600の標識を過ぎて動かないことで実況アナウンサーが絶叫する。直線に入るとさらに後退。アクシデント発生か？場内のファンがどよめくなか14着で入線した。

「スタートしていつもならボンと出るのに行きっぷりが悪くてね。もう1コーナーで手応えがなかったくらい」と高橋三郎騎手。高橋正豪調教師がのちに語ってくれた話だが、この日大井競馬場に到着したカシワズプリンセスはいつもと様子が違っていった。「あれっ？と思ったのは装鞍所。牝馬特有のフケのような仕草を見せた。やれるだけのことはやって来たからここまで来たら自信をもって送り出すしかなかった」。このあと休養を経て再起を目指したが、「母としての血を大切にしたい」と陣営は決断。その判断が東京プリンセス賞馬ネフェルメモリー誕生へと繋がっていく。



# ドルフィンボーイ

1991年生  
父 ルイヴィルサミット  
母 カネアザミ(バーバー)

戦績:12戦7勝

主な勝ち鞍:東京大賞典、東京王冠賞、戸塚記念

調教師:佐々木国広 騎手:山崎尋美

## 早逝の韋駄天ドルフィンボーイ

1996年12月4日3時35分。4歳(現表記3歳)にして優勝した東京大賞典以来2年ぶりに戦列復帰を果たしたドルフィンボーイだったが、スタートした直後にガクンと躓いた。「バキーン」と大きな音がしたという。それでも走りつづけたドルフィンボーイがようやく足を止めたのは3コーナーを過ぎたところだった。あまりにひっそりとした最後だった。

「これでよかったのかもしれない。オレだって、ああいう風に死にたい…よ」馬主の芹沢精一さんに言われてハッとした。

誰よりもドルフィンボーイの復活を待ち望んでいた人。そうでなきゃ、2年もの間、手を尽くすはずがない。企業戦士にとっての死に場所が会社なら、競走馬にとってレースで散るのは本望なのかもしれない。

ドルフィンボーイは母から類い希な俊脚を譲り受けていた。そして気性の激しさも。

「不受胎が続いたので静岡の乗馬クラブに譲ったところ、父の判らない仔を身ごもっているという連絡がありました。それで再び繁殖に戻しましてね。翌年に出産したのがドルフィンボーイです」

ドルフィンボーイは宿命の仔。

この母カネアザミはドルフィンが東京大賞典を勝った年に廃用されている。そして父ルイヴィルサミットも同じ年、精虫のなくなる病気に突然かかって九州の乗馬クラブに転用された。

もしも、気性難がなかったら、種牡馬という道もあったかもしれない。乗馬に転向しても均整のとれた馬体は目を引いたろう。でも、ドルフィンボーイには走るしかなかった。

いつも気性との闘い。レースでもハナに立てないことには話にならない。休養させたくても受け入れ先がない。調教さえ担当厩務員の池田孝さんが、自ら跨るしかなかった。それも他馬がない静まりかえる時間になってからのことだった。

そんなドルフィンだからこそ、復帰に向けて調整にも時間がかかった。競走馬が費やす丸2年は、とてつもなく長い時間。中央遠征を断念した直後に大手術。そして広島府の装蹄師さんの元に預けての治療が始まった。北海道を経由して、復帰のメドが立たないまま厩舎に戻ったのは1年前のことだ。

悪夢の翌々日、厩舎の馬頭観音で小さな葬式が行われた。ドルフィンボーイはすでにタテガミだけになっていた。佐々木国広調教師をはじめスタッフの誰も背中が、後悔と無念で震えていて、かける言葉がなかった。

走るために生まれて、そのまま駆けぬけたドルフィンボーイよ、安らかに…。12戦7勝。戸塚記念、東京王冠賞、東京大賞典制覇という輝かしい成績を残して、<1997年1月号「さらならドルフィンボーイ」より>

# インテリパワー

1995年生  
父 ルシオン  
母 インテリパワー(オウインスパイアリング)

戦績:48戦15勝

主な勝ち鞍:川崎記念、浦和記念、ダイオライト記念、金盃2回、マイルグランプリ、サンタアニタ外ロー

調教師:秋山重美 騎手:今野忠成、張田京

## 新世紀初のG1ホースに輝いた 貫禄インテリパワー

2000年2月。新世紀となって初めて行われたG1川崎記念を制したのがインテリパワー。2000mの川崎コースを舞台に東京大賞典1、2着馬を抑え込んだ。張田京騎手が右手を大きくあげてガッツポーズ。ニューヒーローの誕生に場内はわいた。

インテリパワーは北海道でデビューし、中央を経由して秋山重美調教師の元へ移籍してきた。5連勝のあと報知オールスターC2着、サンタアニタローフィーで待望の初重賞。暮れには浦和記念を勝ってトップホースの階段を昇っていった。

「この馬のことは全日本2歳優駿に遠征してきたときに見ていたが、アグネスワールドの2着に敗れたと言ってもタイムは破格で、力のある馬だと思っていた。中央では思ったような結果は出ていなかったが、蹄を痛めた影響もあったんではないかな。蹄を伸ばして整えるまでに時間がかかったね。その間の夏は暑さ負けもひどかったから、川崎記念という目標掲げて無理なく使っていた」と秋山調教師。そして、言葉通り川崎記念を戴冠。『NARグランプリサラブレッド系4歳上最優秀馬』も獲得した。

素直な気性と自在性あるレース運びで実力を発揮し、春にはマイルグランプリ、6歳で金盃制覇。この金盃で手綱をとっていたのが今野忠成騎手。59キロの重斤を背負いながら泥んこの雨馬場でキャニオンロマンと繰り広げた熱闘。現在は川崎のトップジョッキー今野騎手にとって初重賞制覇だった。

7歳になって船橋の川島正行厩舎に転厩。金盃、ダイオライト記念を制し、8歳になると今度は笠松へと移籍。どんな環境に身を移しても堂々たる実績を残してきたインテリパワーだったが、2003年11月24日に出走した緒戦の東海クラウンにて競走中止。これが最後のレースになった。

その後は広島で種牡馬になったが、2007年に誕生したエイワンガールー頭を残したのみで、2006年には用途変更になっている。



# ダイヤモンドコア

1995年生  
父 ジェイドロバリー  
母 ライフポート(ファインポート)

戦績:23戦5勝

主な勝ち鞍:桜花賞、東京2歳優駿牝馬

調教師:井上有蔵 主戦騎手:森下 博

## 深窓の令嬢 ダイヤモンドコア

東京2歳優駿牝馬でのことだ。鞍上の森下博騎手が3コーナーで手綱を控えた。アクシデントか？

見ている方は肝を冷やしたが、「いや、前の馬に脚がもうないのがわかったからゴチャゴチャするのを避けていったん待ったんだ」と森下騎手は余裕の笑顔。馬の力を信じたからこそできた好騎乗だった。意外なことに数々の重賞を手にしてきた森下騎手にとって初めての自厩舎でのタイトルだった。

デビューから4戦3勝で東京2歳優駿牝馬を勝ち、前哨戦の桃花賞から桜花賞制覇と牝馬クラシックはダイヤモンドコアの完勝幕開けとなった。

シバノコトエが逃げ、2番人気のチャリオットが続き、ダイヤモンドコアは5番手を進む。3角手前では2番手まで進出、直線入り口では逃げ馬も捕らえて7馬身差をつけてゴールした。

関東オークス2着、東京プリンセス賞6着。この時すでに病床にあった井上調教師はクラシックを見届けると旅立った。「母の母であるマリーノビーチは懇意にしていた吉田善哉さんが基礎牝馬にしようとして輸入したものを無理を言って譲ってもらった馬。この長距離血統にファインポートのスピードを配合したら面白いだろうと。この馬の活躍はファインポートの血もいよいよ最後だから残そうっていう何かがあったのかもしれないね」と嬉しそうに語る笑顔が忘れられない。

弟子の佐々木国広調教師に引き継がれ、古馬になると交流にも積極的に挑み札幌や京都にも遠征してチャンスを求めた。「いかにもお嬢様って感じてね。レースでも入れ込むことはないし、いつも堂々として何があっても動かない。7時間の輸送だろうと平然と寝ていたよ(笑)」と佐々木国広調教師。

5歳で繁殖に上がったダイヤモンドコアは5年後にアグネスタキオンの牡駒を産む。それが羽田盃馬ナイキハイグレード。井上調教師の執念による血脈がまた1つ花開いた。

# エスプリシーズ

1999年生  
父 カコイーシーズ  
母 スマコパレディ(スマコバクリーク)

戦績:23戦10勝

主な勝ち鞍:川崎記念、報知オールスターC、京成盃グランドマイラーズ、船橋記念、東京湾C

調教師:武井榮一 主戦騎手:森下博



2004年2月4日の川崎競馬場はエスプリシーズの川崎記念完勝にわき上がった。2:12:8のタイムは2001年にレギュラーメンバーが記録した従来のレコードをコンマ1秒詰める破格タイム。やり合う前を見ながら道中3番手をキープ。そこから早め抜け出すと、迫る武豊鞍上のスターキングマン(2着)を4馬身振りきってゴールイン。念願だった交流重賞初制覇となった。

2歳11月のデビュー戦を53秒台で駆け抜け一躍脚光を浴びたエスプリシーズ。

3連勝のあと重賞初挑戦のニューイヤーカップで3着し、京浜盃(2着)、雲取賞(1着)からクラシックロードに順調に駒を進めたかに思えた。ところがいざクラシック、羽田盃(4着)、東京ダービー(9着)とゲート入りに手こずってしまう。テンションMAX状態でスタートが切れ不完全燃焼な結果で春を終えた。ソエを気にしていたこともあってJDDを回避し立て直しの放牧へ。この決断が功を奏した。

ひと夏の成長はめざましかった。東京湾カップで待望の初重賞勝ちすると船橋記念で2つ目のタイトル。その年の暮れから京成盃グランドマイラーズ、報知オールスターC川崎記念と重賞三連覇と破竹の勢いで輝いていた。

王道一直線に突き進んできたエスプリシーズが5歳になり、さあ、これからという時に脚部不安を発症。長い休養を余儀なくされる。夏には帰厩するも戦列復帰の軌道に乗りきれない。師走の報知オールスターで出走にこぎ着けるも11着に大敗し、これが引導となって陣営は引退させることを決意した。

2005年1月24日の最終レース終了後にエスプリシーズの引退式が行われた。川崎記念を制したときのゼッケン「7」をつけてファンの前に登場。森下騎手を背にして直線を駆って最後の雄姿をファンに披露した。

種牡馬となって、クラシックでの無念、川崎記念連覇の夢、見果てぬ想いを次世代へと委ねている。

## 王道を駆け抜けた 強者エスプリシーズ



# モエトレジャー

2001年生  
父 トレジャーアイランド  
母 イブキピンクレディ(ノーザンテースト)

戦績：99戦15勝(2012年9月現在。現役)

主な勝ち鞍：浦和記念、戸塚記念、しらす賞、埼玉新聞杯、摂津盃、姫山菊花賞

調教師：足立勝久(現在は荒山義則厩舎)

主戦騎手：金子正彦



2006年に川崎を離れてから早6年。11歳になった今も兵庫で走りつづけているモエトレジャー。9月7日に始まった園田競馬場ナイターのオープニングを飾るメインレース摂津盃にもその姿があった。摂津盃には5年連続6度目の出場となり、2008年には優勝。11歳になってからも12戦して2勝、2着2回とまさしく古豪健在である。

厩舎では「チビ」と呼ばれていた。新馬戦では419キロ。それでもあっさり先頭に立つと5馬身ちぎった。軽快なス

ピードが武器となっていくが、一方ではゲート内でガチャガチャと落ち着かず出遅れることも多かった。

「最初見た印象は、男馬にしては小さくてこんなに走るとは思っていなかったというのが本音。たしかに骨格は小さくてもバランスよく、パネの良さは感じさせたね。だんだん背が高くなり体重が増えてくると共に力をつけているのはわかった。ゲートさえすんなり出してくれば馬なりでいいスピードを見せるんだけど、毎回ハラハラしたね」と足立勝久調教師。

当時は3歳戦だったしらす賞を逃げ切り勝ちしてクラシックに挑んだ。羽田盃4着、東京ダービー12着、いずれも出遅れてしまった。ところが、ひと夏を越すと本格化。これまでにない好位からの競馬で戸塚記念を優勝、埼玉新聞杯、さらにはダートグレード浦和記念を鮮やかに逃げ切った。「クラシックで強い相手にモまれた経験が身になっていったんだと思う。ガサはないけどいつも一生懸命走るタイプで、使うたびに心身が強くなっていった」と金子正彦騎手。

古馬とやり合うようになって「逃げ」と「出遅れ」を繰り返したが、逃げた時の粘りは最後まで渋たく、川崎記念やダイオライト記念でも掲示板は確保するほどの安定感があった。善戦はするもののあと一步のレースが続くようになり、モエトレジャーは新たなチャンスを求めて2005年5月10日、園田へと向かった。

古豪健在なり！  
今も現役を続ける  
猛者モエトレジャー

# ロッキーアピール

1998年生  
父 Valid Appeal  
母 Dame's Rocket(Timeless Native)

戦績：56戦10勝

主な勝ち鞍：さきたま杯、かきつばた記念、アフター5スター賞

調教師：山崎尋美

主戦騎手：山崎誠士



ロッキーアピールが川崎にやって来たのは5歳秋のこと。中央ではオープンクラスにいたもののGⅢや特別戦でも苦戦続き。道営を経由して求めた新天地だった。

ところが緒戦から逃げ切り勝ち。水が合ったとはこのことか、二戦目には準重賞も手にした。そして重賞戦線でも善戦するようになって挑んだダートグレードさきたま杯。スピードを生かす競馬に徹した今野騎手の手綱は迫る後続に影を踏ませることなく凌ぎきった。

「中央時代にはタイムオーバーになったこともあるように、レースをやめてしまう面があるんだ。だから金子オーナーの持ち馬とはいえ南関東で通用するか半信半疑だった。今野騎手には砂をかぶらないレースをしてほしいと指示したが、うまく乗ってくれた。ペースもゆったり流れて自分の競馬ができた。ムラなところもあるようだけど、揉まれる競馬も覚えさせたいね。でもこの年からじゃ無理かな」と乗り方に難しい面があり、当初は山崎尋美調教師のコメントも控え目。7歳でアフター5スター賞を抑えた競馬で勝ち、8歳ではダートグレードのかきつばた記念を制する交流ハンターへと進化した遅咲きでもあった。名古屋コース1400mを見事逃げ切ったときには山崎誠士騎手のガッツポーズが高々と上がる。今では川崎でも上位争いをしている山崎騎手にとって初めての重賞重賞、父子での初タイトルになった。

南関東だけでなく名古屋、高知、中央にも遠征して息の長い活躍を続けた“ちょいワル親父”も9歳になると、「張りもあるしモツヤはいいが、年齢と共に回復力は落ちてきた」と言われるようになった夏、浦和の準重賞ブラチナCがラストランに決まった。ラストランにふさわしい渾身の逃げ。3着に粘った。

引退後には千葉の成田ゆめ牧場で乗馬に転向し、往年を知るファンを喜ばせていたが、2011年に脚部不安を発症して継続が難しくなり、現在は担当していた暮部厩務員やファン有志によって引き取られ静かな余生を過ごしている。

遅咲きの“ちょいワル親父”  
ロッキーアピール



# 川崎のアラブたち

## 一世風靡し血を繋げた アラブのスターホース

1950年代の中央競馬では出走数の3割を占め、地方競馬でも1970年代の登録数を見ると1万2000頭と日本の競馬界の礎になってきたアラブだが、1995年の中央に続き翌年、南関東でもアラブ競走は廃止された。川崎では全日本アラブ走覇（平成8年で廃止）鎌倉記念（昭和58年で廃止。現在の2歳重賞とは別物）、やまゆり賞（かつては白百合賞。昭和58年で廃止）、アラブチャンピオン（昭和60年で廃止）といったアラブ重賞が行われ数々のスターを生んできた。

スマノガイドウは6歳になって鈴木春吉厩舎にやって来た。アラブダービーや銀盃を制し33戦21勝という強者。種牡馬としてもアラブチャンピオンに君臨しつづけ血の枝葉を広げた。

タイムラインは鈴木春吉調教師の元でアラブダービーや全日本アラブ大賞典でレコード勝ち。兵庫に移籍してからも兵庫大賞典を制するなど活躍し、種牡馬としてもローゼンホームやコスモノープルなどを配して父タガミホマレから続く優秀な血を伝えた。

リーディングサイヤーに名を連ねたトライバルランパーが競走馬として走ったのは4歳（現表記3歳）のみ。村田六郎厩舎に所属してアラブ王冠や全日本アラブ優駿杯賞、白百合賞を制した。

トライバルランパーの半弟ポールドマンは父がサラのポールドラッド。村田六郎厩舎からデビューして8連勝した快速馬。アラブ王冠を勝ち、兄弟制覇を成した。

アラブの逸材を多く出した川崎のなかでも「生まれてきた時代が悪かった」としか言いようがないのはランドアポロ。全日本アラブ走覇で19年ぶりにレコードを塗り替えたマルシンヴィラーゴ、さらには南関東アラブ最強馬トチノミネフジ。いつも前に抜きん出た一頭がいて全日本アラブ走覇、千鳥賞、アラブダービー、ワード賞と2着づくし。巡り合わせが生んだ「悲運の無冠馬」だった。

# 佐々木竹見 インタビュー

## 川崎競馬で育って



川崎競馬が生んだ競馬界の鉄人、佐々木竹見騎手。昭和35年6月20日のデビューから41年間騎手生活を送り、39092戦に騎乗して7153勝という前人未踏の金字塔を打ち立てました。川崎競馬で出会った人や馬たちのこと、そして思い出のエピソードを語っていただきました。

●15歳で青野調教師の元へ弟子入りされたんですよね。

<佐々木竹見> きっかけは上泉華陽さんという馬の絵を描く先生との出会だった。中学3年の時に友達と映画を見に行ったら荷物を抱えた人が前を歩いていって、「持ちましょうか？」と声をかけたんだ。「ちょうどいい体つきだね、騎手にならないか？」と話が進んで紹介されたのが師匠の青野四郎先生。

初めて厩舎に着いた時はすごいところに来てしまったなあと思ったよ（笑）。今は鉄筋の厩舎がほとんどだけど、その頃はみんな木造。厩舎の端にある部屋で最初は六畳で厩務員さんたちといっしょに寝起きをして、そのあとは一人で三畳の部屋。3年間は見習いだったから、先生の靴磨きしたり、掃除したり、送り迎えても何でもした。馬の調教が終わると革靴脱いでゴム長に履き替えて寝わらもあげた。うちの先生（青野四郎調教師）は厳しかった。血統にも詳しい勉強家で、

いっしょに併せ馬して一から教えてくれるんだけど、朝起きてから寝るまで叱られてばかりだった（笑）。

●15年間連続して南関東リーディングでしたね。

<佐々木竹見> 昔は各厩舎に乗り役がいてそれぞれ乗せたもんだが、今は乗り役にとってたいへんな時代になったよね。昔は川崎だけで30人はいた。35年に18歳でデビューして、38年に初めてリーディングとれるかと思っていたら落馬でケガ。外うちまでふっ飛んで4ヶ月休んだ。それで大井の松浦さんに越されてしまったが、翌年からずっとリーディングを獲らせてもらった。駆け出しの頃、活躍していたのは大和田明さん。永田旭さん。佐々木吉郷さん。杉山さんも連者だった。それに岩本洋さん。河津（政明）さんもいっしょに乗ったけど巧かったんだよ。当時は他場に行くと乗馬はボツリボツリだったが、他からもいい馬乗せてもらって恵まれていたとあらためて思う。



## 佐々木竹見インタビュー 川崎競馬で育って

●竹見さんといえば先行馬のイメージがありますが。

＜佐々木竹見＞うちの先生が、とにかく行け行けとうるさかったから、先行する下地ができてしまったんだな。馬に逆らわずに乗ってればいったん交わされても直線最後また差し返す馬もいるからね。豪快に追い込んで勝つタイプの乗り役もいるけど、やはり先行した方が有利なことの方が多かった。川崎は内に入ったらダメ。道中少し損してでも外を回った方がいい。川崎はカーブがきつから挟まれたり、包まれたりしやすいからね。そこはいつも気をつけてた。大井はとにかくガマン。ある程度いい位置つけてじっとチャンスを待ってれば内があいたもんだ。

●重賞を143勝されていますが、川崎で印象深い馬という？

＜佐々木竹見＞ダービーを勝ったヒガリユリはもちろんだけど、ダイタクジーニアス（鳥飼春弥厩舎）という牝馬が印象深いね。報知オールスターCでロジータ負かしたんだから。あの時は1600mの内から行って、3コーナーでグイグイ手応えがいいと思っていたら直線一気に伸びて、ゴールまであと30mというところでロジータを交わした。相手がロジータだからというわけじゃないけどあれはホント気分がよかった。重賞4つくらい勝ったのかな。ダイタクジーニアスの子供にも乗ったよ。あとは（鈴木）敏一さ

んところのカネオオエ。大井の金盃で63キロ背負って勝った。あの馬は左回りが苦手だったな。川崎での初重賞は岩本さんところのムーンで、中国から最後差した。

●2001年に引退されて、2003年には竹見カップが始まりましたね。

＜佐々木竹見＞こういう騎手にスポットが当たって全国のリーディングが川崎に集まるのはすばらしいこと。引退して教養センターで講師をするようになった教え子の町田くんが出場したときは嬉しくてね。月に2回教えてたんだが、夢は全国からどんどん教え子たちが竹見カップに乗りに来るようになることだね。

●ありがとうございました。引退から10年が過ぎ、70歳の古稀を迎えられましたが、今でも競馬への情熱がおさまることはないという佐々木竹見さん。6度の大ケガから不屈の精神で再起した『執念』の人でもあります。



# 川崎競馬に 所属した 騎手たち

・騎手名の下の日付は南関東における勝負服の指定日～抹消日  
・騎手名の前に★が付いているのは再指定された勝負服

南関東の勝負服指定が始まったのは昭和29年1月11日のこと。それまでは馬主が用意したものや騎手個人がそれぞれ気に入った服装で騎乗していたそうです。





杉山信幸

S29.1.11 ~ S42.6.19



高橋満夫

S29.1.11 ~ S33.6.30



永田旭

S29.1.11 ~ S46.6.19



山口進弘

S29.1.11 ~ S33.1.18



荒川嘉幸

S29.1.11 ~ S43.6.1



菅原譲

S29.1.11 ~ S34.7.1



鈴木定敏

S29.1.11 ~ S32.7.31



村田幸男

S29.1.11 ~ S32.12.31



片岡松夫

S29.1.11 ~ S31.6.5



三田三郎

S29.1.11 ~ S34.7.1



鎗田幸男

S29.11.1 ~ S30.7.15



★鎗田幸男

S31.6.13 ~ S36.6.1



河津政明

S29.1.11 ~ S30.6.5



★河津政明

S30.6.10 ~ S46.6.1



仁平作

S29.1.11 ~ S32.7.31



會田助治

S29.1.11 ~ S39.6.1



高橋久志

S29.1.11 ~ S31.6.5



★高橋久志

S31.6.13 ~ S37.6.1



塩野照義

S29.1.11 ~ S34.7.1



遠藤二郎

S29.1.11 ~ S32.7.31



梅垣清

S29.1.11 ~ S30.7.15



金井弘司

S29.1.12 ~ S36.7.1



岩本亀五郎

S29.1.11 ~ S32.7.31



山浦一雄

S29.1.11 ~ S39.6.1



今井輝平

S29.1.11 ~ S33.6.30



成井栄三

S29.1.11 ~ S39.6.1



鈴木春吉

S29.1.11 ~ S33.6.30



高橋竹次郎

S29.1.11 ~ S30.7.15



梅山満

S29.1.11 ~ S32.7.31



中島正治

S29.1.11 ~ S37.6.1



安池保

S29.1.11 ~ S36.7.1



水沼章雄

S29.1.11 ~ S30.7.15



鳥飼元脩

S29.1.11 ~ S29.1.30



★鳥飼元脩

S29.1.30 ~ S37.6.1



山崎三郎

S29.1.11 ~ S32.3.8



★山崎三郎

S32.3.8 ~ S37.6.1



工藤清吉

S29.1.11 ~ S31.6.5



嶺庚平

S29.1.11 ~ S31.6.5



海藤良吉

S29.1.11 ~ S33.6.30



井上宥蔵

S29.1.11 ~ S33.6.30





中島覚

S29.1.11 ~ S33.6.30



石原満喜男

S29.1.11 ~ S30.7.15



杉村繁盛

S29.1.11 ~ S32.7.31



小笠原円之助

S29.1.11 ~ S32.7.31



下山喜萬多

S29.1.21 ~ S32.7.31



新屋幸吉

S29.1.21 ~ S31.6.5



高月由次

S29.1.21 ~ S37.6.1



高松長雄

S29.1.21 ~ S32.7.31



勝又衛

S29.1.11 ~ S39.6.1



田中正隆

S29.1.11 ~ S33.6.30



前田絹二

S29.1.11 ~ S30.7.15



柿木茂

S29.1.11 ~ S31.6.5



武田武雄

S29.1.21 ~ S34.7.1



大宮全

S29.2.4 ~ S34.7.1



大和田明

S29.2.15 ~ S36.3.26



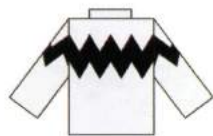
★大和田明

S36.3.27 ~ S42.6.19



鈴木喜雄

S29.1.11 ~ S32.7.31



三橋三吉

S29.1.11 ~ S37.6.1



細川一吉

S29.1.11 ~ S33.6.30



中島武次

S29.1.21 ~ S34.7.1



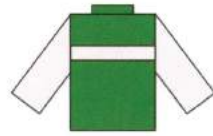
山口昇一

S29.7.9 ~ S36.6.1



中村好夫

S29.7.9 ~ S31.6.5



中里和夫

S29.7.9 ~ S35.7.1



照沼一二

S29.7.9 ~ S39.6.1



長田玉得

S29.1.21 ~ S35.7.1



青野四郎

S29.1.21 ~ S39.6.1



大沼五郎

S29.1.21 ~ S37.6.1



青木保

S29.1.21 ~ S36.7.1



冷水瀧之助

S29.7.9 ~ S35.6.1



船山正吉

S29.7.9 ~ S34.7.1



名取文人

S29.7.9 ~ S37.6.1



広野保義

S29.7.9 ~ S40.7.10



八木正雄

S29.1.21 ~ S33.6.30



高城守

S29.1.21 ~ S37.6.1



滝沢久夫

S29.1.21 ~ S37.6.1



勝又専次郎

S29.1.21 ~ S33.6.30



川本美之

S29.7.9 ~ S31.6.5



新貝啓介

S29.7.9 ~ S37.6.1



新貝一雄

S29.7.9 ~ S32.7.31



大津正三

S29.7.9 ~ S33.12.30

★印は再登録時に勝負服の変更を行った騎手





松浦甲子男

S29.10.20 ~ S35.6.1



金浜益造

S30.6.10 ~ S34.7.1



三國徳次

S30.6.10 ~ S35.6.1



新井一郎

S30.6.10 ~ S40.7.10



★阿部新一

S40.6.16 ~ S43.6.10



石島鉄男

S32.6.6 ~ S35.5.24



江藤鉄也

S32.6.6 ~ S35.7.1



勝又泉

S32.6.6 ~ S40.7.10



長沼正義

S30.6.10 ~ S31.6.5



★長沼正義

S37.6.13 ~ S42.6.19



秋山重美

S30.6.10 ~ S42.6.19



相澤新七

S31.6.13 ~ S39.6.1



佐々木國廣

S32.6.6 ~ S39.6.1



★佐々木國廣

S44.6.5 ~ S47.6.1



佐藤修吉

S32.6.6 ~ S37.6.1



関口文男

S32.6.6 ~ S35.8.27



内田静男

S31.6.13 ~ S39.6.1



小野時夫

S31.6.13 ~ S35.7.1



勝田一郎

S31.6.13 ~ S35.6.1



佐々木吉郷

S31.6.13 ~ S53.12.1



高橋正豪

S32.6.6 ~ S43.6.12



仁平実

S32.6.6 ~ S35.7.1



藤ヶ崎一男

S32.6.6 ~ S35.6.1



松村友二

S32.6.6 ~ S42.6.19



染谷利雄

S31.6.13 ~ S42.6.19



高橋稔

S31.6.13 ~ S35.7.1



田中一弘

S31.6.13 ~ S34.7.1



田中儀男

S31.6.13 ~ S40.7.10



横山登

S32.6.6 ~ S35.6.28



河野進蔵

S33.6.16 ~ S42.6.19



亀浦則三

S33.6.16 ~ S39.6.1



小池康寛

S33.6.16 ~ S35.6.1



西山義一

S31.6.13 ~ S36.6.1



八木弘

S31.6.13 ~ S39.6.1



山崎勝

S31.6.13 ~ S37.6.1



阿部新一

S32.6.6 ~ S35.7.1



佐藤養助

S33.6.16 ~ S35.6.1



松田久

S33.6.16 ~ S35.8.27



★松田久

S42.6.7 ~ S46.6.1



宮田牧一

S33.6.16 ~ S39.6.1

★印は再登録時に勝負服の変更を行った騎手

★印は再登録時に勝負服の変更を行った騎手





森田伊久治

S33.6.16 ~ S33.8.20



田村豫志雄

S34.6.10 ~ S53.12.1



津田和雄

S34.6.10 ~ S42.6.19



根本秀夫

S34.6.10 ~ S39.6.1



保利眞

S37.6.13 ~ S39.6.1



柘榴喜八郎

S37.6.19 ~ S42.6.19



飯島昭

S38.4.1 ~ S42.6.19



中里功

S38.4.1 ~ S56.8.31



★根本秀夫

S42.6.7 ~ S43.6.10



前田章

S34.6.10 ~ S35.6.1



小山田輝夫

S35.6.17 ~ S39.6.1



佐々木竹見

S35.6.17 ~ H14.6.1



横田清

S38.4.1 ~ S48.6.1



中之丸忠義

S38.7.1 ~ S57.9.29



平井光二

S38.7.10 ~ S39.6.1



岩本洋

S38.12.24 ~ S54.6.1



高田勝良

S35.6.17 ~ S36.6.1



細川潔

S35.6.17 ~ S42.9.8



★細川潔

S42.10.8 ~ S44.6.1



加藤徳明

S36.6.4 ~ S42.6.19



近藤国弘

S38.12.24 ~ S42.6.19



橘眞樹

S39.1.7 ~ H3.6.1



加藤孝雄

S39.7.6 ~ S48.6.1



木村騎一

S39.10.1 ~ H3.6.1



★加藤徳明

S44.6.5 ~ S50.6.1



桑田孝雄

S36.6.4 ~ S39.6.1



佐々木勇

S36.6.4 ~ S39.6.1



原 孟

S36.6.4 ~ S47.6.1



竹島春三

S39.10.9 ~ S56.6.1



工藤功

S39.12.1 ~ S42.6.19



村田六郎

S40.4.8 ~ S48.6.1



藤山勝義

S40.4.8 ~ S42.6.19



大久保千治

S37.6.13 ~ S43.6.1



大和田五郎

S37.6.13 ~ S48.6.1



草場健次

S37.6.13 ~ S43.6.1



福田春彦

S37.6.13 ~ S47.6.1



長谷川茂

S41.4.1 ~ S57.6.1



寺内進

S41.4.1 ~ S48.6.1



金井利行

S41.4.4 ~ S48.6.1



河本雄治

S42.4.10 ~ S46.6.1





北田代則夫

S42.4.10 ~ S43.6.1



齊藤潤

S42.4.10 ~ S48.6.1



中村敏

S42.4.10 ~ S44.6.1



三潟隆次

S42.6.7 ~ S47.6.1



鹿戸春二

S46.4.5 ~ S51.6.1



佐藤貞一

S46.4.5 ~ S52.6.1



本間茂

S46.4.5 ~ H3.6.1



岩本実

S46.6.1 ~ S62.6.1



岩切敏男

S43.4.9 ~ S48.6.1



佐藤雅通

S43.4.9 ~ S49.6.1



瀧ヶ平利実

S43.4.9 ~ S47.6.1



村上直美

S43.4.9 ~ S47.6.1



大和田義男

S46.6.4 ~ S56.6.1



大垣敏夫

S46.10.5 ~ S51.6.1



加納龍生

S46.10.5 ~ H8.6.1



塚本力

S46.10.5 ~ S51.6.1



瀬口三男

S43.6.8 ~ S48.6.1



中田義宣

S43.6.8 ~ S47.6.1



福島時夫

S43.6.8 ~ S55.6.1



松永茂明

S43.6.8 ~ S51.6.1



東原己俊

S46.10.5 ~ S54.6.1



伊東将光

S47.4.5 ~ S60.4.1



小瀧篤

S47.4.5 ~ S51.6.1



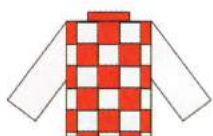
塩谷健

S47.4.5 ~ 不明



鍋山信雄

S44.6.5 ~ S46.6.1



長谷川三郎  
(西野)

S44.6.5 ~ S49.6.1



重村隆司

S45.4.15 ~ S57.6.1



松島久義

S45.4.15 ~ S49.6.1  
S51.7.6 ~ H7.6.1



関村孝治

S47.4.5 ~ H8.6.1



熊澤廣通

S47.6.9 ~ S58.6.1



中地健夫

S47.6.9 ~ H14.6.1



内田勝義

S47.10.5 ~ S61.6.1



馬庭良文

S45.4.15 ~ S46.6.1



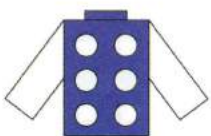
山田正実

S45.4.15 ~ S61.6.1



熊坂次男

S45.6.10 ~ S55.6.1



織田武

S46.4.5 ~ S51.6.1



岩淵達弥

S48.4.16 ~ S51.6.1



原三男

S48.4.16 ~ S56.6.1



宮川進

S48.4.16 ~ S53.6.1



市村勲

S48.10.13 ~ H5.6.1





山崎尋美

S48.10.13 ~ H9.6.1



福井英学

S49.4.17 ~ S58.9.29



松岡幹雄

S49.4.17 ~ S53.6.1



嘉久和孝

S49.10.12 ~ S53.6.1



鬼沢裕充

S57.4.8 ~ H12.6.1



河津裕昭

S59.4.5 ~ H14.6.1



佐藤喜良

S60.4.5 ~ H12.6.1



高松淳一

S60.4.5 ~ H15.6.1



一ノ瀬亨

S50.4.24 ~ H20.6.1



津久井誠

S50.6.10 ~ H12.6.1



中野五男

S50.6.10 ~ S63.6.1



川浪泉

S50.10.15 ~ H1.6.1



岩城方元

S60.10.1 ~ H24.6.1



川島眞実

S61.4.1 ~ H1.6.1



久保勇

S62.6.1 ~ H18.6.1



田山信則

S63.9.29 ~ H15.6.1



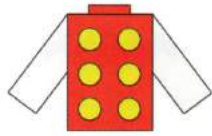
篠原久雄

S51.4.8 ~ S61.4.1



高橋信弘

S53.4.5 ~ S62.6.1



田邊陽一

S53.4.5 ~ H13.6.1



野口睦三

S53.4.5 ~ H13.6.1



岡村裕基

H1.4.1 ~ H19.6.1



深野壘

H2.4.1 ~ H17.6.1



鈴木淳

H3.9.29 ~ H13.6.1



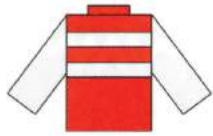
田島寿一

H4.4.1 ~ H14.6.1



加藤弘明

S53.6.15 ~ H5.6.1



山浦武

S53.6.15 ~ H9.6.1



安池成実

S54.6.5 ~ S60.6.1



野崎武司

S54.10.12 ~ H17.6.1



甲斐年光

H4.6.1 ~ H18.6.1



戸川理彩

H5.4.1 ~ H15.6.1



内田秀一

H5.6.1 ~ H13.6.1



山野勝也

H6.4.1 ~ H23.6.1



久保秀男

S55.4.5 ~ H15.6.1



水久保敏美

S55.4.5 ~ H15.6.1



佐々木仁

S56.4.10 ~ H11.6.1



伊原昭浩

S56.6.1 ~ S57.9.29



阿部幸一郎

H7.9.29 ~ H9.6.1



稲子善行

H8.4.1 ~ H17.6.1



福元弘二

H8.4.1 ~ H17.6.1



内田竹彦

H10.10.1 ~ H18.6.1





飯塚直仁

H12.9.29 ~ H15.6.1



世安智也

H13.10.1 ~ H16.6.1



前住和寿

H14.4.1 ~ H23.6.1



上村尚寛

H14.6.1 ~ H16.6.1



沖野耕二

H14.10.1 ~ H19.6.1



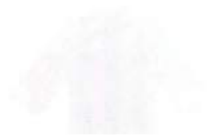
鈴木義久

H15.4.1 ~ H16.6.1



中地雄一

H16.4.1 ~ H24.6.1



◇現役騎手◇

2012年11月現在



伊藤裕人

H21.4.1 ~



金子正彦

S54.10.12 ~



郷間勇太

H18.10.1 ~



今野忠成

H6.9.29 ~



酒井忍

H13.6.1 ~



佐藤博紀

H10.10.1 ~



山林堂信彦

H9.4.1 ~



杉村一樹

H24.1.18 ~



田中涼

H23.4.1 ~



拜原靖之

H13.10.1 ~



藤江渉

H11.10.1 ~



本田紀忠

H19.4.1 ~



増田充宏

H14.10.1 ~



町田直希

H17.4.1 ~



森下博

S48.10.13 ~ S53.6.1



★森下博

H55.6.10 ~



山崎誠士

H15.10.1 ~

★印は再登録時に勝負服の変更を行った騎手



# 川崎競馬一門系譜図

●青野四郎

- 佐々木竹見
- 大垣敏夫

●足立関男

- 草場健次
- 足立勝久

- 岩城方元
- 中地雄一

●秋山良作

- 高橋満夫
- 山口昇
- 遠藤守
- 菅原譲
- 秋山重美

— 鈴木義久

- 柘榴喜八郎
- 村上直美
- 森下博
- 大和田義男
- 伊原昭浩
- 田山信則

●今井輝平

- 平井光二
- 今井博
- 水久保敏美
- 今井輝和
- 鈴木淳

— 岩本洋

- 飯塚直仁
- 長谷川(西野)三郎
- 岩本実

●梅山満

- 藤ヶ崎一男
- 相沢新七
- 佐藤雅通
- 塩谷健
- 梅山和則
- 鬼沢裕光

●遠藤二郎

- 山浦一雄

— 郷間勇太

●稲垣宗

- 稲垣純緒
- 高橋敏男
- 世安智也
- 町田直希

●井上有蔵

- 鶴田誠司
- 高田勝義
- 仁平実
- 佐々木國広
- 加藤弘明
- 池田孝
- 林隆之
- 杉村一樹
- 山林堂信彦
- 竹島春三
- 長谷川茂

●岩本亀五郎

- 三浦常雄
- 鳥飼元脩
- 馬庭良文
- 齊藤潤
- 鳥飼春弥
- 岡村裕基
- 長田玉得
- 新屋幸吉
- 金浜益造
- 松村友二
- 高橋正豪
- 佐藤貞一
- 佐藤喜良
- 内田秀一
- 松村友二
- 寺崎貞美

●大津正三

- 成井栄三
- 寺内進
- 福島時夫
- 川浪泉

●海藤良吉

- 中村好夫
- 松田久
- 大久保千治
- 海方昭三
- 平松利久次
- 横田清
- 中田義宣
- 東原己俊
- 松永茂明
- 原三男
- 伊藤裕人



●河津晴一  
 一不破  
 一河津政明  
 一河津裕昭  
 一沖野耕二  
 一田島寿一  
 一加藤誠一

●保利眞  
 一長沼正義  
 一橋眞樹  
 一加納龍生

●柿木茂

●片岡松夫  
 一杉山信幸

●新貝一雄  
 一新貝啓介  
 一廣野保義  
 一藤山勝義  
 一網本直記  
 一鍋山信雄  
 一織田武

●杉村繁盛  
 一桑田孝雄  
 一小山田輝夫  
 一渡邊幸生  
 一北田代則夫  
 一市村勲  
 一高橋信弘  
 一杉村勝実

●鈴木定敏  
 一杉山愛二郎

一津久井巖  
 一津久井誠  
 一高橋久志  
 一山下一雄  
 一福井英学  
 一中島覚  
 一前田章  
 一中島正治  
 一中島武次  
 一本間茂  
 一川島眞実  
 一佐藤博紀  
 一高城守  
 一阿部幸一郎  
 一加藤徳明  
 一福田春彦  
 一岩渕達弥  
 一鈴木敏一  
 一今野忠成

●勝又泉吾  
 一小笠原内之助  
 一田村豫志雄  
 一内田竹彦

一勝又衛  
 一三橋三吉  
 一山田正実  
 一伊東将光

一内田静男  
 一勝又泉  
 一佐々木勇  
 一中之丸忠義  
 一福元弘二  
 一中地健夫

●勝又専次郎  
 一安池保  
 一鹿戸春二  
 一安池成実

一佐藤勇  
 一石島鉄夫  
 一内田勝義

●川本美之

●工藤清吉

●合田助治

●佐藤金秋  
 一三潟隆五郎  
 一三潟隆次

一河本雄治

●下山喜万多  
 一塩野照義

一伊藤利義  
 一戸川理彩  
 一上村尚寛

一佐藤鉄次  
 一佐々木吉郷  
 一瀧ヶ平実利  
 一佐藤健二

一武田武雄  
 一山崎三郎  
 一船出正吉  
 一山崎勝  
 一阿部新一  
 一木村騎一  
 一山崎尋美  
 一山崎誠士  
 一山崎裕也  
 一栗林信文  
 一高松淳一  
 一三田三郎



●高橋竹次郎  
 | 金井弘司  
 | 萩原征治  
 | 金井利行  
 | 青木保  
 | 平田正一

●高松長雄

●滝沢久夫  
 | 岩切敏男

●武井歌次  
 | 大沼五郎  
 | 武井利夫  
 | 篠原久雄  
 | 武井榮一  
 | 久保勇

●仁平作  
 | 冷水龍之助  
 | 金田  
 | 飯島二郎  
 | 飯島昭  
 | 福島幸三郎  
 | 野崎武司  
 | 福島秀夫  
 | 前住和寿

●長谷川蓮太郎  
 | 波多野高次  
 | 大和田明  
 | 瀨口三男  
 | 中野五男  
 | 深野壘  
 | 佐藤修吉  
 | 工藤功  
 | 大和田五郎

●八木正雄  
 | 中里和夫  
 | 永田旭  
 | 新井一郎  
 | 田辺陽一  
 | 八木弘  
 | 八木正喜  
 | 染谷利雄  
 | 勝田一郎  
 | 佐藤信雄  
 | 中里功  
 | 八木仁  
 | 酒井忍  
 | 拜原靖之  
 | 飯田幸雄

●塚本力

●鈴木春吉  
 | 根本秀夫  
 | 田中儀男  
 | 吉橋淳一  
 | 松島久義  
 | 野口睦三

●鈴木喜雄  
 | 中地英夫  
 | 金子正彦

●高月金五郎  
 | 加藤武  
 | 高月由次  
 | 中村敏  
 | 関村孝治  
 | 高月賢一  
 | 本田紀忠

●田中正隆  
 | 神立忠  
 | 松岡幹男  
 | 重村隆司  
 | 名取文人  
 | 久保秀男  
 | 山口進弘  
 | 甲斐年光  
 | 武井和実  
 | 田中涼  
 | 山田質

●照沼一二  
 | 亀浦則三  
 | 小瀧篤  
 | 嘉久和孝  
 | 佐々木仁  
 | 増田充宏

●細川一吉  
 | 細川潔  
 | 藤江涉  
 | 稻子善行  
 | 山浦武  
 | 宮川進  
 | 熊沢広通  
 | 熊坂次男  
 | 津田和雄  
 | 加藤孝雄

●村田幸男  
 | 田中美義  
 | 佐藤  
 | 鎗田幸雄  
 | 村田六郎  
 | 山野勝也  
 | 村田順一





神奈川県騎手会旅行 昭和32年4月16日

[前列左から]長谷川蓮太郎・海藤良吉・下山喜万多・県の山本氏・県の木村氏・村田幸雄・八木正雄・岩本亀五郎・県の村田氏・高橋満夫・鈴木春吉・鳥飼元修[後列左から]青木保・山口・成井・鶴田誠司・不明・勝田一郎・鈴木喜雄・柴谷利雄・中島正治・細川一吉・三橋三吉・杉山信幸・不明・飯島二郎・高月由次・中村四郎・不明・前田氏・照沼一・二・金井弘司・鎗田幸雄・馬主会 飯島氏・梅山満



神奈川県調騎会旅行 昭和43年4月26日

[前列左から]県の加藤氏・馬主会 飯島氏・県の職員・県の木村氏・県の職員・岩本亀五郎・県の並木氏・長谷川蓮太郎・梅山満[2列目左から]よみうりランド職員 よみうりランド 小笠原氏・今井輝平・滝沢久夫・村田幸男・井上有蔵・津久井巖[3列目左から]河津晴一・鳥飼元修・波谷厩務員・高橋満夫・八木弘・三橋三吉・安池保・広野保義・左城守・八木正雄[後列左から]鈴木喜雄・山下一雄・鈴木厩務員・永田旭・照沼一・杉山信幸・勝又衛・青野四郎・足立関男



神奈川県調教師会旅行 昭和53年12月5日

[前列左から]新貝一雄・井上有蔵・河津晴一・長谷川蓮太郎・岩本亀五郎・八木正雄・神立忠[2列目左から]武田・秋本厩務員・鈴木厩務員・三橋三吉・青木保・高橋久志・梅山満・青野四郎[後列左から]事務局 鉄指・事務局 中塚・竹島春三



神奈川県調教師会親睦旅行 昭和62年4月24日

[前列左から]大和田明・中之丸忠義・大沼五郎・梅山満・岩本亀五郎・八木正雄・勝又衛・新貝啓介[2列目左から]田村豫志雄・寺内進・青野四郎・武井利夫・安池保・足立勝久・中島正治・福島幸三郎・鈴木敏一・武井栄一[3列目左から]日本馬匹 小林氏・ガードマン・山下一雄・伊藤利義・岩本洋・鈴木春吉・長谷川三郎・新貝一雄・津久井巖・稲垣宗・高月由次・八木弘・河津政明・事務局 鉄指・今井博・三橋三吉[後列左から]村田六郎・杉村勝美・八木仁・大和田五郎・久保秀男・福井英学・飯島二郎・松田久・山崎三郎





調教師会旅行 平成5年2月21日

[前列左から]寺内進・鈴木敏一・大和田明・佐々木国広・八木正雄・井上有蔵・山崎三郎・津久井巖・八木仁・三橋三吉・長谷川三郎[2列目左から]河津政明・秋山重美・田村豫志雄・新貝啓介・中島正治・杉村勝実・事務局 鉄指・山田正実・福井英学・中野五男・よみうりランド 石川氏・よみうりランド 楠本氏[後列左から]原三男・高橋敏男・稲垣純緒・厩務員・福島幸三郎・八木弘・武井栄一・鳥飼春弥・金井厩務員



岩本亀五郎調教師 感謝状授与式 平成13年6月13日

[前列左から]佐藤健二・新貝一雄・八木正雄・岩本洋・川崎競馬組合 大山副管理者[2列目左から]長谷川茂・鈴木敏一・山田正実・武井栄一・安池保・福井英学・足立勝久・三橋三吉・広野保義・高月由次・金井弘司・福島幸三郎[3列目左から]鳥飼春弥・村田六郎・八木正善・鬼沢裕充・池田孝・田村豫志雄・杉村勝実・高月賢一・伊藤利義・長谷川三郎・原三男・内田勝義・稲垣純緒・三淵隆次・河本雄治・大和田明・山崎尋美・安池成実・飯田幸雄・佐々木仁[後列左から]相沢新七・川崎競馬組合 佐藤氏・大和田五郎・川崎競馬組合 川崎氏・梅山和則・川崎競馬組合 草川氏



平成24年秋

発行 川崎競馬倶楽部 <http://www.kawasakikeiba.com>

制作協力 神奈川県川崎競馬組合、神奈川県調教師会、神奈川県騎手会、神奈川県馬主協会、関東公営競馬主催者協議会、よみうりランド、耳目社、競馬ブック、秋田実さん



# 川崎競馬

—伝えたい記憶 残したい記録—



2010年12月17日第10競走  
川崎競馬倶楽部盃 グッドラック特別